

あるいは現在進行形の黒歴史

—殺戮天使が俺の嫁?—

あわむら赤光
イラスト: refeia

試し読み体験版

堕天使ダー? ミカエルの剣 能力者 吸血鬼
天使の天使 天使の天使
殺戮の天使 殺戮の天使
マリスたんハアハア

中二天国キタコレ!

契約者 エンジェリックコード
絶対少女黙示録

これが俺の妹の妄想力だということか……?!
ヤンデレクーデレ GA文庫



女神の聖天使

メーブル

リトル・ヴァンパイア☆
キケロクロツトリーナイトメア

マシエル

殺戮の天使

紅薔薇の剣姫

ロザンドーシ・ヴァルハーン炎煌

わたつみの海妃

アイシヤールロナー伶美

万色にじて無貌の天使

ナースィー真機那ハーシエル



麗しきものよ、棘持つものよ
その罪なる矛盾の力を
戒めと変えて
我が眼前の敵を縛るべし

地の底より現れたのは――
いや、咲いたのは真紅の薔薇。
それも無機質な駐車場を
一瞬で花園に変えるほど大量の。



官能的なまでにぶにぶに濡るかい感触が、
強く掌に押し付けられる。
「うあ……あ……」

「……楓子はいっ、英二を好きになっただの?」

いきなりマリスさんにそんなことを訊かれて、あたしはびっくりした。

びっくりしたんだけど、他ならぬマリスさんの質問なら全力で答えないとダメだし、
というわけで、あたしは悩む。

んー、そうだなー……。

元々あたしはお兄ちゃんの子だし、フランクだって周知の事実だったんだけど――

はつきり「好きだなー」って思ったのはあの時かなあ?」

去年さ、中学入ってすぐだし、新しくできた友達の間で「スプ」して遊ぶのが流行ったのよ。
マリスさんは知ってる、「スプ」? ランバとか漫画とかアニメとかゲームのキャラと同じ服
着て、そのキャラになじめるの! 楽しいの!」

「……それなら知ってるわ」

あ、じゃあ話が早いね。幼馴染の舞子ちゃんがそういう服いっぱい持っていて、気軽にでき
たつても流行った理由かな?

んで、もう二つ皆の間で流行ってたものがあつたの。

あたしが布教した結果なんだけど、「く」自慢ね?」「エリメントXIII」っていうランバが大
流行でさ。特に裏主人公って呼ばれる黒崎水城が「超カッソイイね」「憧れるね」って皆で悶
えまくってさ。

ある時、あたし言っちゃったのよ。

水城の「スプ」させたら、うちの兄ちゃんより似合う奴いねえ！って――

まあ、なんか半分勢い……。似てるのは目つきの悪さだけかな……。あと全然違う……。でもさあ、そしたら皆が「見せて！ 見せて！」って大はしゃぎはじめて。舞子ちゃん（幼馴染＝兄ちゃん（面識アリ）まで「似合うかも……」「とか言いだして。もう、引込みつかなくなっちゃったのよ……」。

だから、あたし、行きました！ 兄ちゃんに「スプ」してくれって頼みに行きました！

かわい〜い笑顔を作って、目をうつろ〜とさせて、こびこび〜な仕種で行きました！ 即、ぶたれました！

うん……。あの人、昔からあたしにだけ容赦ないんだ……。

「ザケンナ！ こつちや受験で忙しいんだ。しかもそんなつ恥ずかしい真似できるかー！」「って怒鳴られたよ〜。

でも、そんなこつめげる楓子ちゃんにはありません。

土曜だったし。兄ちゃんの部屋に押しかけて、深夜まで説得しまへったの。まずは一巻読んでみて。面白いから。ハハハから。そしたらきつ「スプ」したくなるから。この魂に刻まれた、孤独の業が俺をまだ強くさせる……」「とか言いたくなるからって。舞子ちゃんに借りた水城の衣装と一緒に、既刊全部無理矢理受けとりさせて。

まあ、部屋から叩きだされた。

んで次の日、皆に失敗報告行つたのよ。すこすこ。近所のファミレスに。プチ☆「スプ」パーティーする約束だったから。

皆、いい子だから。誰も責めなかつたけど。」「残念〜」「みたいなムードがひびくてもう、あたしなんか「生きててスイメン」状態！

しかも、間の悪いこつて重なるのよね。

なーんかガラの悪そうなの三人組にナンパされちゃったの。」「この服と髪、あそつて可愛いね？ 君ら姉妹？」とか馴れ馴れしいの。「エ्रेसー」の九部ちゃんと零ちゃん（スプ）したつ。双子設定で、あたしと舞子ちゃん（姉妹じゃないつ）。

とにかくもうサイッパクな連中。

ううん。ヤローなんて皆そう。。。どこいじもこいじもうんざり。男は二次元だけでいいわ。三次元でステキなのって兄ちゃんだけ。

も、ほんとこいじい連中でき。断つても断つても聞かなくて。髪とか肩とかさわわって泣きだしちゃうまで出て。キョークな人相してたから、店の人も知らんぷりで。

「イッパどなにしたらか、ほんまにー。みたいなー。

「……殺せばいい」

いや、マシだった。それはダメだから。シャレならんから。

ムカツクからうてす。殺っちゃいけないよ？ 楓子ちゃんとの約束。

「……わかった」

「……楓子、まつ」

はいはい。じゃあ、ナデナデしながらお話ししようね。

んでまあ困ったところ、サッシーと駆けつけてくれたのが兄ちゃんなわけよ。

「……結局、来てくれた？」

そうよーん。うちの兄ちゃんさー、なんだかんだあたしに甘いからさーデヘヘ。

可愛い妹が約束守れなくて、友達の間で肩身の狭い思いしてるって心配したんじゃないのー？

ちゃんと「スプ」もしてくれたしね。白髪のカツラに赤いカラコン付けて、黒いコート着てオモチャの刀引っ提げてね。

「……トンチキな格好」

いやいやいや。カッコいいですよー。全然カッコいいですよー。

それが水城の「ス」なんですー。

「……したの？ 英二が？」

したした。そのカツで大立ち回りした。ムカツク三人ぶつとばした。

「……殺した？」

だから、殺さないって！ ヤバいって！ 普通にケンカして追い払ってくれただけ。そいつの見た目ばっかりでんで弱かったから。兄ちゃんの敵じゃなかった。

しかも兄ちゃん、水城の決め台詞言った！

「元素神の罪を問へくまでもない」とか言った！

「六聖六呪の争いにやいやいなさな、人間ども」ってハハハで言った！

あんだけ嫌がってたくせにもう三巻まで読んでんじやん！ って感じだった。

兄ちゃんてほんと食わず嫌いだから。誰に似たんだろ。

でもさ……。

うつつぐさの……カッ」みかつたなあ……。

まっ一回してくれないかなあ……。

「……その時に好きになった？」

うん、自覚したのは多分、その時なんだと思う。

兄ちゃんさ、頭堅いし、ロヤカましいし、陰険だし、一見強いかなって思ってた。

優しいし、あたしのことが大事だててくわねるし、ツバガキや下まけはうつつぐさの……って。で。

やつぱ、うん、大好きだなあ。

「……わかった。聞かせてくれて、あじがっ」

いいよ、いいよ。おれなんていいよ。

おれなんかいいから、今度はマリスタんの番だよ。

「……え？」

だーからー。わかるでしょっ

マリスタんはいつ兄ちゃんのごと好きになつたのか、お・し・え・て？

「……………」

ハイ、だんまり禁止。

「……笑わない？」

笑わないよ！ あたしだって女の子なんだから、こ女心はわかるよ！

「……わかった」

うんうん、それで？

「……あの日、私が——」

第一幕 新しい朝が来た。希望の朝だ。

夏休みに入つて三日が過ぎた。

俺——吉岡英二の朝は早い。今朝も六時起床だ。

中学時代のダチは皆、毎日昼まで寝てるらしい。少し羨ましい。ベッドの温もりに恋しさを感じる十五歳・高一。それが俺。

でも、「あと五分……」とかベタなことを言っていると、父さんにぶん殴られちまう。モタはできない。着替え、洗顔をさっさと済ませ、竹箒を持つて外に出る。

父さんはとにかく躰けが厳しい。夏休みだからってだらしない生活態度は許してくれねえ。

俺は家の裏手にある神社（正確には、神社の裏手に家がある）に行き、境内の掃除を始める。ふあ、寝む……。体、ダル。

でも、これは心地よい疲労つて奴だ。充実感伴うつて奴だ。

昨日も俺、夜遅くまで勉強したからなあ。まったく学生の鑑つて奴だよ。我ながら偉いよ。なあ、そう思うだろう？ フハハ。

俺はあくびを噛み殺しながら、テキパキと境内を掃き清める。慣れたもんさ。

ここの掃除は神主である父さんに命じられた、朝の日課なんだよ。これに夏休み、クリスマス、バレンタインの時期はもう一つ仕事加わる。

俺は神社の横手に行くと、

「ウヘエ……」

そこに奉納された山のような絵馬を見て、うんざりした。

うちが代々神主を務める、この葦原神社には本来戦いの神様が祭られている。

だけど、とある事情があつて今では恋愛成就、縁結びにご利益があるつてんで絶大な支持を得ている。おかげ様をもちまして、前述の三シーズンには洒落にならない数の参拝客がやってくるんだよ。もう、絵馬が飛ぶように売れるの。

何分小さな神社のことでございますからね。絵馬を奉納する絵馬掛も小せえし、シーズン中は隣間もないほどびっしりと埋め尽くされてしまうんだ。それが問題なんだ。

これじゃすぐにいっぱいになって、新しく奉納できないだろ？ 古いものから順に毎日少しずつ、絵馬掛から外してかないとダメなわけ。

外したものはすぐさま、境内の端で焼納する。浄めの炎（ぶつちやけ普通の焚き火）で焼いて、天に納めるのが俺のもう一つの日課だった。

「しかし、よーもまー毎日毎日これだけの絵馬が集まるもんだぜ。男と女の数ほそんにな変わらんのだから、カップルなんざ人口の半分だけポコポコ生まれそうなのにな」

ぼやきつつも、恋愛の需要と供給は、バランスがとれてないことを重々承知している。

例えば、俺の妹はモテる。顔がいいから呆れるほどモテる。

ほら、コレ……この絵馬。

プライバシーに関わるから、書かれてあることは見ないようにしてんだよ、俺。でもさ、絵馬いっぱいにかかると「楓子」なんて書かれてると、嫌でも見えちゃう。不可抗力だよ。その楓子ってのが俺の妹な。

この絵馬、奉納した奴も何考えてんだかな。百歩譲ってうちのバカ妹に懸想するのはいいとしてだ。その娘さんの実家である神社に、こんな目立つもん奉納する神経がわかんねえ。いっそラブレターでも書いて直接送って来いよ。アグレッシブなんだか受け身なんだかわかりやしねえよ。

けどよ——信じられねえことに、この手の絵馬がごろごろしてるわけよ。探さねえけどな。それくらい、バカ妹のモテっぷりはハンパねえ。

「ま、どうでもいいか」

俺は分量で一抱えほどの絵馬を外す。袋に入れるとけっこうな重量になるんだ。辟易しながら焼き場に運ぶ。

「しかし、おまえら……他にやることあるだろうに」

一枚一枚丁寧に焚き火へくべながら、俺は見知らぬ他人のことが心配になる。

大人はわざわざ恋愛成就の祈願なんかしない。この山のような絵馬を奉納したのは学生だ。夏休み中のアバンチュールを願ってるわけだ。

どうもこいつもバカだね。学生の本分は勉強だろうが。

おまえらが「××ちゃん(君) 大好き」とか言ってる間に、賢い奴は机にかじりついて、おまえらを引き離しにかかっているわけよ。この俺みたいに。

願い叶おうが失恋しようが、おまえらを待ってるのは不幸だけさ。

青春を謳歌したいって気持ちにはわかる。そりゃ俺だってわかる。

だけど、おまえらだまされてる。今は必死に勉強して、いい学校行つて、いい会社入つて、笑顔の可愛い奥さんもらつて、幸せな家庭を築くための努力をする——その方が絶対いいって考えてみるよ？ 青春時代なんてたかだか十年そこらだろ？ でも、俺らの人生はその後の方が何倍も長いんだぜ？

どちらに重点を置くべきか、効率いいか、火を見るよりも明らかさ。いやマジでマジで。今は苦しくても耐えて、牙を研ぐ時期なのさ。俺はそう思うね。痩せ我慢抜きに。

人間は性欲じゃなくて理性で生きるもんなんだから。道理や理屈をわきまえないとな。

「さって——」

俺は時間をかけて全ての絵馬を焚き火にくべ、帰宅する。燃え尽きるまではまだまだ時間がかかるが、今日は風が強くないので後は放つておいても平気だ。

朝の日課終わり。

裏口から家に入り、台所に近づくと、味噌汁のいい匂いが食欲を誘った。

我が家の台所はいわゆるダイニングキッチンで、食堂も兼ねている。八人がげのテーブルには既に父さんがいて、新聞を広げている。

吉岡京平、三十九歳。

知らない人が見れば、「ひいつ、熊が座ってる!？」と腰を抜かすこと間違いない風貌。妹ともども母親似でよかったと俺はいつも思う。

あんたが「京平」って柄かよ、「凶兵」の間違いじゃないの？ とつくづく思う。

「おう、御苦労」

俺がテーブルに着くと、父さんは新聞を畳み、息子の日課の労をねぎらってくれた。心臓の弱い人が聞いたなら、卒倒しそうなドスの利いた声で。

「楓子は？」

「まだ起きとらん」

額に青筋浮かべながら、忌々しそうにする父さん。

楓子には朝の日課はないが、「食事は一家そろって」がモットーの父さんは寝坊を許さない。世の父親は息子に厳しく娘に甘いつて聞くよな。だけど、吉岡家にそんな家風はない。拳骨だ。俺は妹の末路を憐れむ。

いや、自業自得だ。俺なんか父さんを怒らせるようなことは絶対にしない。そう肝に銘じてんだよ。

あれは——五歳の時だったかな？

ちよっと遠回りになるが聞いてくれ。俺には四つ年の離れた兄貴がいる。俺に似ず、性格の悪いサデイストだ。暴君だ。ゴリラのような体格をしていて、超つええ。

去年から遠くの大学に行つて、家にいない。おかげで俺は人生十五年目にしてようやく平和を手に入れた——ってまた話が逸れてら、悪い。

とにかくそのサドゴリラに、五歳の俺は反旗を翻した。今にして思うと、青かったな……。兄貴が小学校に行っている間に、兄貴が大事にしていた M G ウィングガンダム・ゼロカスタムを裏山に捨ててきたんだ。日ごろいびられてる復讐で。

まあ、後でひどい目に遭った。

庭の木にロープで逆さ吊りにされて、「人間サンドバッグだぜ」ってボコボコにされたよ。

マジギレしてたんだろうな。兄貴、目が据わつててさ。殺されるって思ったよ。

で、頭に血をのぼらせた兄貴は、持ち前の狡猾さを失っていた。いつもは父さんらに見つからないように慎重に俺をいびるんだが、あの時はそういうの氣にかけてなかった。

だから、父さんに見つかつたわけよ。「ずいぶん、楽しそうなことをしているな」って。

俺、チビっちゃった。いや、父さんは兄貴を叱りに、俺を助けに来てくれたわけよ？ でも、俺をボコボコにした兄貴より、父さんの怒りの形相の何万倍も怖かった……。

当の兄貴なんかも、大洪水……。

翌朝、俺の代わりに一晩中木から吊り下げられてた兄貴を見て、俺は幼心に誓つたね。

ああ、上には上がいる。俺は父さんだけに逆らわないようにしよう——てな。

ちよっと話は長くなったが、そんな父さんに怒られないように日々心がけているおかげで、俺は自然と品行方正な青少年になれたってわけ。

だけど、楓子は性根悪いんだよなあ……。怒られても、怒られても反省しないんだよなあ。

「英二、起こしてきてあげなさいよ」

母さん（名前は優子）が、茶碗にご飯をよそいながら言った。

父さんが殴り起こす前に優しくしてやつてという助け舟だ。父さんと違って娘に甘い。

黒髪ロング、且つおでこを前髪で隠さない（時代とは逆行している）のがとても似合う和風

美人。もともと俺にすれば、母親が美しかろうとその逆だろうとどうでもいいことだけだね。

毎日美味しいご飯を作ってくれることの方が重要だ。

むしろ、俺は思うわけよ。四十近いおばさんなのに、未だに巫女さん姿（仕事着）が似合うんだよ、この人。俺のダチにもファン多いんだよ。正直、気色悪い……。

「ええー、メンドクせえなあ」

「そんなこと言わないの。お兄ちゃんでしょ？」

「どうせまた夜中までラノベ読み耽^{かげ}つてたんだろ？ 悪いの、あいつじゃん……」

俺がぶつぶつ言いながら渋^{しぶ}々席を立とうとすると、

「ズズ……放^{はな}つておけ。ちゃんとしている英二^{なま}が怠^{おろそ}け者のために煩^{わづら}わされる必要はない。ズズズ……腹が減^へつただろう。飯を食^くえ。楓子は朝飯抜きだ……ズズズ」

茶をすすりながら父さんが待^{まち}ったをかけた。

さすが父さん、道理^{ことわり}つてもものがよくわかつてるぜ。尊敬^{尊敬}するぜ。

ところが――

「もう、あなたつたら厳しいんだから」

「これも楓子^{かえり}のためを思^{おも}つてのことだ」

「そんなところがス・テ・キ」

「ぶほー……」

いきなり母さんにほっぺにチュウされ、父さんが飲みかけの茶を盛大に嘔^{おう}き出す。

せつかくの威厳^{いげん}が台無しだ。

「や、やめなさい、優子^{ゆうこ}さん。英二^{えいじ}が見ている」

「あら、見^みせてやればいいのよ。ラブコメ的指導^{ラブコメ的指導}よ」

「………………どんな指導^{指導}だよ、母さん……」

「ん？ ほら、お母さん、ラブコメ好きでしょ？」

「ああ、いい年^{とし}してな」

「若^{わか}いって言いなさいよ。とにかくだから、あんたが立派なラブコメ野郎^{やろう}になって、漫画^{まんが}みたいな幸せな人生送^{おく}つて欲しいの。そのための指導^{指導}」

……ならねえよ。要^いらねえよ。

俺は聞^きこえなかったふりをしつつ席に戻^{もど}り、手を合わせて朝食^{しやくし}をいただく。

「ゲフンゲフン。とにかくやめなさい」

「だーめ。ちゅ♥」

「ゲーホゲホゲホッ、ゴホッ、ブホッ、ヒゴッ、ガホゴホガホ、かはあつ……ぜー。ぜー。ぜー」
変な病^{びやう}気^きにでもかかったような咳^{せき}払いで、何とか威厳^{いげん}を保^{たも}とうとする麗親父^{れいおや}。

「ご馳走様^{ちしづよう}」と、上機嫌^{うきげん}でお茶のおかわりを淹^ひれている大和撫子^{だいわなでこ}。

まさに典型的な「美女と野獣」夫婦。

息子^ことしてはそういうのは寝室^{しんしん}でやってくれと、非常にいたたまれない気分になる。

俺は現実逃避^{じやんじつたいひ}気味^きに、ダシからちゃんとした味噌汁^{みそ汁}（美味^{びみ}）と鮭^{さけ}の塩焼^{しほやき}き（親父^{おや}の好物^{好物}）に舌鼓^{したつづみ}を打^うつ。

とはいえ、仲睦^{なかつむじ}まじいこと自体に文句^{ぶんこう}はないんだよな。

死んだじいちゃんも雄牛もかくやの益荒男^{ますらお}だったし、死んだばあちゃんも「葦原小町^{あしはらこまち}（昭和初期デイスト）」と謳^{うた}われた美人^{めいじん}だったらしい。

格子^{こうしこ}越しでなきゃ怖^{こわ}くて会話^{かいわ}もできないようなムツケキ男^{おとこ}たちが、二代そろって町一番の美女^{めいよ}を娶^{めと}った――

この逸話^{いつわ}のおかげで、葦原神社^{あしはらじんしゃ}が「縁結びにご利益^{ごりやく}アリ」と知れ渡^しったんだってさ。

絵馬^{えま}の売上やお賽銭^{さいせん}のおかげで吉岡家は経済的に困窮^{こんきやう}したことがない。俺としても両親^{りやうしん}のバカッブルぶりは望むところなんだ。

多少、あてられはすれど。

「おかわり」

「はいはい」

母^{はは}さんがよそつてくれたご飯に、生卵^{なまたまご}をぶっかけて混ぜる。

未だ^{いまだ}食べ盛^もりの俺は朝から三杯^{さんぱい}食べる。

普通の電子炊飯器^{でんしひはんき}なのに、母^{はは}さんが炊^たくとなぜにこんなに美味しいのか。魔法^{まほう}か。今日^{けふ}も一日^{いちにち}勉強^{べんきやう}頑張^{がんば}ろうって、パワーがみなぎってくるぜ。

俺^{おれ}がささやかな幸せ^{しあわせ}を卵^{たまご}かけご飯^{ごはん}と一緒に噛^かみしめていると、

「ブラザーーーーーー!!!!!!」



謎の奇声が轟いて、危うく茶碗を落としそうになった。

「ねえねえ、ちょっと来て見て聞いてよ、ブラザー！」

「ブラザーってなんだよ、楓子？」

二階の自分の部屋からドッタンバツタン階段を駆け下り、台所に飛び込んできた騒音の主に、俺は苦い顔をして訊く。

妹・楓子、十四歳。中二。

母さん譲りの美貌だけど、目が大きくてちと童顔。頭の両端で髪をひつくくつてるのが、さらにその印象を強めてる。同年代の女の子らと比べてもメリハリの少ない寸胴体型。でも脚はスラっと長くて、腰の位置はびっくりするほど高い。見れば、目を奪われずにいられないだろう。男なら感嘆、女なら羨望のため息とともにだ。その脚線美から「お姫様抱っこしたら映える美少女」町内ランキング三年連続一位を獲得。去年、脚だけ撮るモデルにならないかと誘われ、スカウトマンを殴り倒した経歴アリ。

性格は明るい。明るすぎてウザいくらい明るい。

「兄ちゃんって英語で言ったらブラザーじゃん。英語で呼んだらクールじゃん」

「……………フウ」

そう、バカじゃなければとても可愛いのだ。我が妹ながらもつたいないと俺は思う。今でも

モテるが、黙っていれば百人が百人恋に落ちるだろうにさ。

「あら、今日はちゃんと起きられたのね」

さも意外そうにしつつ、母さんが楓子の分のご飯をよそいだした。

「挨拶はどうした、楓子？」

一方、父さんが答めるような（一般的には射殺するような）視線を向けた。

十五年一緒に暮らした俺でも思わずチビリそうなそれを、

「あ、ごめんごめん、パパママブラザーおはよう」

楓子は自分の頭を小突きながら、テヘッと舌を出して受け流す。全く悪びれてない。

「パパママはともかく、ブラザーはないだろ」

変なラップでも歌いだしそうだ。

この妹は突発的に頭に蛆がわいては、「兄ちゃんてダサくね？ 兄者って呼ぶ方がかっこよくね？」とか言いだすのだ。主にラノベの影響を受けて。

「そんなことどうでもいいのよ、見て見てこれ見て」

飯の最中の俺の周りを、まわりつくようにウロウロする楓子。マジウザい。

さらに楓子は辞書か聖書もかくやという分厚い大学ノート（こんなの売ってるのか？）を鼻先に突きつけてくる。

俺の両手は箸と茶碗で塞がってるのが見ればわかるはずなのだが、そんなのおかまいなし。

「メシの後じゃダメなのかよ？」

「ダメー！ 今見てくれなきゃだー！」

「全くしょうがねえ奴だな、おまえは」

楓子が一度ワガママを言いだしたら絶対に引つ込めないのは重々承知なので、俺は諦めて箸と茶碗を置いた。

「読んでくれるの!？」

「これ以上メシの邪魔されたらかなわないから。仕方ねえだろうが」

俺は肩を竦めるしかない。やれやれだぜ。

「うふ。兄ちゃん、大好き」

もうブラザーは飽きたらしい。呼称が元に戻った。

「はい、これ。お礼のチュー」

「い・ら・ね・え・よ」

唇をタコみにたいにさせた楓子の頭を、俺は上下に挟んでカクテルみたいにシェイクする。

なんだそりゃ？ 母さんの真似か？ おまえ、さっきいなかったよな？ 血？ 遺伝なの？

「うにゃあああ」

目を回した楓子から、俺はノートをぶんどる。ああもう面倒くせえ。

「食事中にものを読むのはやめろ。作ってくれた優子さんに失礼だ。謝れ」

すると父さんに叱られた。額にゴツい青筋を浮かべていた。

「そ、そうだね。ごめん、母さん。ほら、楓子。また後でな」

俺は即従った。

謝れと言われているうちはまだセーフだ。すぐさま改めれば許してくれるというサインだ。ここで「俺が悪いのかよ？ 悪いのは楓子だろ？」とか反論しようものなら鉄拳が飛んでくる。

「はい、楓子も」

「ういー。いただきます」

母さんに茶碗を渡され、復活した楓子がガフガフ食べだす。早くご飯を終わらせたらしい。

「おまえは……もつと味わって食べないか。せっかく優子さんがだな——」

それを見て父さんは嗜めようとするが、

「あら、いいじゃない、味なんて。元気に食べてくれれば私はそれでいいの」

「ううむ、しかし……」

「私が味わって食べて欲しいのは、あ・な・た」

「優子さん、子どもたちが見てる！ 見てる！」

また母さんがキスしようと唇を失せたので、父さんは慌てて固辞した。

「さあ、今日のニュースでも読むかあ」

白々しい白詞を言いつつ、コソコソ引きこもるように新聞を広げる父さん。自分は食事中に

ものを読んでもいいのか。大人ってずるい。

母さんが楓子にウインクする。楓子もサムアップして見せる。

さすがに長年連れ添ってるだけあって、父さんの扱い方が巧い。俺としては楓子の大暴れをきびしく叱って欲しかった。残念だよ。

実際、朝っぱらからの騒ぎのせいで、食欲はどこかに行っちゃってしまっていた。

「ったく。しょうがねえな。ごちそうさま」

俺は三杯のところをご飯二杯でやめ、ぼやきながらノートを広げる。

「もう今度のは超大作！ 超自信作！ 昨日の夜、神が降りてきたんだから！」

「霊媒師かよ、おまえ」

「フ、わかっているではないか。そう、作家とは物語世界と交信する一人の霊能者なのだ」

いきなり芝居がかった声と口調で、楓子が立てた人差し指を振る。こいつは時々こーやって、スイッチが入る。公衆の面前でやったら蔑視されること間違いなしの自爆スイッチが。

「小説も書けなくせに作家とか自称すんな」

「ぶっちゃけないでー！」

まあ、俺がツッコむとすぐ涙目になったが。この辺は可愛いもんだな。

「お母さんにも後で読ませて」

全員の食事の世話が終わり、自分の食事を始めながら母さんが言う。

「母さんがそんな怖いもの知らずだったとは思わなかったよ」

「それがね、今回はあたしも何か感じるものがあるのよ。ノートを見ただけでわかるわ」

「母さんまで霊能者みたいなことを……あ、てか、じゃあ俺が読む必要は——」

「だべー！ びいちゃんぼちゃんどびよんで。ばだじのぐどうをびで！」

「わかったから、口いっぱいメシ頬張って喋んな……」

うひっ。こっちまで飛び散ってきた。バッチイ！

掃除するの俺なんだぞ？ ほんと迷惑な奴だな。ティッシュどこだっけ？

「つか、苦労って何だよ。まさか一晩中書いてたとか言わないよな……」

それほどの情熱をかけて、今度は何を書いたのかと俺は嫌々ノートをめくる。

A4サイズ一面にびっしり埋まった文字の羅列を見て、早や眩暈を覚えた。

「今度のはね、『エレサー』みたいなバトルもののなの！」

「……おまえのはいつもバトルものじゃないか」

「天呼たんみたいな激萌えヒロインたちが戦うの！」

「……もう『エレサー』バクった方が早いんじゃないか？」

「二次創作も悪くないけど、あたしはオリジナルにこだわりたいの！」

楓子には空想癖がある。で、何やらお話めいたものを思いついてはそれを膨らませて、ノートに書き綴るのが趣味なんだ。

その空想を妄想の域まで昇華させる天才なんだが、あいにくと他者に伝える技術がない。ありていに言うと、小説とか漫画とか娯楽作品・物語として形にすることはできないんだ。じゃあ、ノートに何を書いているのかというと、思いついたお話の設定を延々羅列するだけ。例えば、今回のノートの一枚目にはこう書いてあった（頭痛くなるので読み飛ばし推奨）。

ストーリー：地上に逃げてきた五体の美少女墮天使を、主人公の美少女聖天使が追っかけてきた！五体の墮天使と聖天使はそれぞれ地上の男（当然美形）を《婚約者》に得て、現代社会に溶け込む。そして、聖天使は《婚約者》と協力し、墮天使たちを一体また一体と倒していくのであった！……！！……！！……！！

以下、登場キャラ設定。

ちなみに（）内はあたしのセルフポイントなので必見なのだよ！



・女神の聖天使メーブル——墮天使たちを追っかけてきた、聖なる天使様（♥）。美貌、スタイル、性格と三拍子そろった主人公。（ぶっちゃけあたしそっくりといえば、どれだけパーフエクトかわかるーものよっ、フオオフオオ）

・殺戮の天使マリシエル——一番弱い墮天使。メーブルと最初に戦って敗れる。冷血無比で、見たもの全てを殺さねば気がすまない、クールビューティー。大量虐殺能力特化。（無愛想なクーデレが微笑むところに萌えない奴は非国民と断定していいと思う人は拳手！）

・わだつみの海妃アイシヤリア＝ロナ＝怜美——一番目に弱い墮天使。でも、水中戦最強。チャイナドレスの似合うお姉さまキャラ。（しかも、きゅめー。おっはいー！おっはいー！おっはいー！おっはいー！おっはいー！おっはいー！おっはいー！）



・リトル・ヴァンパイア☆キケロクロット＝ナイトメア——真ん中の墮天使。血を吸った人間の心を意のままに操る驚異の能力でメーブルを苦しめる。（ロリポジョンですぜ、旦那。勿論、設定上は一万年の夜を生きる吸血鬼なんで、うざってー法律も無問題ですぜグへへ）

・万色にして無貌の天使ナーシエ＝真機那＝ハーシエル——一番目に強い墮天使。どんなもの、どんな姿にも変身することができる。恐るべき暗殺者。果たしてその正体を見破ることができるのか？（ちよいとマジシリニアスキャラ。ここらでガチンコバトルでデコ入れしとかないと

お客さん逃げるしね！マークティンゲンも意識できるあたしマジ神！

・紅薔薇の剣姫ロザリンド・ヴァルハラ炎煌——真紅の鎧をまとった最強の墮天使。特に一対一の戦闘では無類の強さを持つ。墮天使なのに高潔な性格で、メーブルと最後の死闘（素晴らしい一騎討ち）を演じる感動のフィナーレ。（もう想像しただけで涙なしに語れないと思うよね？ ね？ ね？）

以上が、設定の触りだった。



「……………」

「なになに、兄ちゃん。感想聞かせて？ あ、わかった！ 感動で声も出ない？」

「ああ、ある意味感動したよ。血がながってるのに、どうしておまえだけこんなにアホなんだろうって」

「なにそれひどい。あたしのどこがアホだったのよ!？」

「とりあえずこの（ ）内には一切ツッコまないからな？ きりがいいからよ」

「セールスポイントなのに!？」

「『わだつみ』と『海妃』で意味被ってるってわかつてる？」

「えっ……」

「小難しいあだ名ばつかなのに、何で急に『リトル・ヴァンパイア☆』？ 英語？ 英語がクールなの？ しかも、この『☆』の意味は？」

「うっ……」

「『ロザリンド・ヴァルハラ炎煌』とかもうどこからツッコんでいいのかわからないドイツ系なの？ 英語系なの？ 何で漢字なの？ 『ジ』って何、『ジ』って？ 定冠詞なの？ 子音の前なのに『ザ』じゃないの？」

「ぐっ……」

「あと、この女神なのか天使なのかはつきりしない奴——主人公？ だけ名前が普通なのもスゲー違和感ある」

だからって、現実アリエネー名前も失笑ものだけど。

「そ、それはあたしを投影した主人公だから。楓って英語で言ったらメーブルじゃん」

「そんなら普通に『カエデコ』とかじゃダメなのかよ？」

「あたし、自分の名前好きじゃないもん。友達にもメーブルって呼んでもらってるもん」

「贅沢な……」

楓子のどこが悪いんだよ。お洒落じゃないか。ぶっちゃけ、羨ましいよ。

少なくとも、「英国旅行で感激したついでに励んだ結果できた二番目の子」という、あんな

りな理由で「英二」と名付けられた俺よりよほどマシだ。

仮に中国旅行だったら、「中二」と名付けられていたのか？

ヤベエ。考えるだに空恐ろしい。

「兄ちゃんもカタカナで『エイジ』とか、英語で『age』って書けばかつこいと思うよ？」「イタイイタしいわボケ」

「エイジ——その名を貴様の胸に刻め」

芝居がかった仕種でビシィっと人差し指を突きつける楓子。

「黙れ、デコ助」

俺は自分に酔ってるバカの前髪をかき上げ、ドズッとデコピンした。

「あ、またそのあだ名で呼んだー！」

楓子が両手でオデコを押さえながら、涙目になって抗議する。

「かえで、こ」だから「デコ助」なんだが、最近母さんに似て額が広がってきているのを気にしているこいつ（前髪で必死に隠している）は、過敏に反応するようになった。

「兄ちゃんなんか年齢〓カノジョいない歴の癖に！」

「ちよっ、今はそんなこと関係ないだろ!? なに人の急所的確にえぐってんだよ！」

「近くにいるかわい〜い女の子の存在に気づかないからそうなるんだよ！」

「いや、わけわかんねえよ」

何だ？ まだ小芝居入ってんのか？ 正氣に戻るまで、もう一発デコピンが必要か？

「とにかく全部読んでよ！」

「ハア!？」

この数百ページはあろうノートに垂れ流された、言葉の形をした生ゴミを全部!? 何だ？

新手の兄貴いびりか？

「悪い。俺、涼しいうちに勉強しときたいんで、また今度な」

俺は慄然とし、ノートを放り投げようとしたが、

「読んでよ」

楓子がしつこいので、投げる代わりに聖書みたいなゴツイ角を使つてその頭をはたいた。

「兄ちゃん、いたひ……」

「峰打ちだ」

楓子の涙交じりの文句を一刀両断する。

「ふえええええん、兄ちゃんがぶったー」

「あああもううるせええ、わーったよ、読んでやるから泣き真似すんな！」

「エヘヘ」

クソウ演技とわかってても結局ワガママを聞いてしまう自分の弱さが憎い。

俺はとてもみじめな気分です。ノートを開く。やれやれだぜ。

設定の触りがあった一ページ目は読んだので、二ページ目をめくると――

女神の聖天使　メープル



本編の主人公。顔よし、スタイルよし、性格よしの三拍子。ぶっちゃけ、あたしそっくりの美少女聖天使。装備は光の剣（ガンダムのビームサーベルとか、スターウォーズのライトセイバーみたいな奴）と、白いビキニアーマー（ちよつとH）。聖天使たちより強く、万能型の戦闘力を持ち、ぶっちゃけ最強。特に究極絶技（超究覇王滅閃）はビルすら一撃で消滅させる威力を持つ。スピードスターとして天界では名を馳せ、誰よりも早く空を翔けることができる。その最高時速はぶっちゃけマッハすら越える。また、人払いの結界など様々便利な結界を張る能力もある。とにかく主人公に相応しい強さを持つが、情に脆く、涙に脆いという弱点も持つ（これもまた主人公扱いよね☆）。地上では普通の男の子を《婚約者》に選ぶ。ちよつと素直じゃなくて、でもいざとなったら頼れる、包容力のあるお兄ちゃんキャラと一目で恋に落ちる（でもメープルの片思いなのよ、るるる）。でも、メープルはとても健気に――

途中で目が文章を読むのを拒否した。

「ザケンナ！ このメープルとかいうクソ天使だけで数十ページも設定あるじゃねえか！」

「読み応えあるでしょ？」

「拷問だ！ おい待て……うわ、マジか……。この調子であと五体もいんのか……」

「ふふん、あたしのやることに手拔かりはないのだ」

「確かに超大作だな。なんかもう妄想ってより、妄執（もうしゆ）じみてるよ」

「でしょでしょすごいでしょー？」

褒めてねえよ。皮肉だよ。

俺は頭痛と嘔吐感に悩まされた。ノートのせいで文字酔いした。

せめて読み物仕立てにしてくれていたら、ここまでひどい症状は出なかっただろう。

「ワリ。ちよつと休憩させて」

「あ、じゃあじゃあ、あたしが朗読してあげようか？」

茶碗をペロっと空にした楓子がケロっと言う。

「……おまえさ、羞恥心とかないわけ？ こういうの中二病とか言うんだろ？」

「邪気眼中二病ね」

「馬鹿にされてるんだろ？」

「リアル中二だから恥ずかしいもん」

そういう問題なのか？

「とにかくよー。よく知らないけど、普通こういうのって自分一人で悦に浸るもので、他人には知られたくない黒歴史的なもんじゃないの？」

いや、趣味そのものは個人の自由さ。俺だってわかってら。

ただね。こいつの親友の舞子ちゃんなんか、家族が掃除しに部屋に入っただけで「趣味を見られた」って恥ずかしがって泣くんだけ？　そういうデリカシーは期待しちゃいけないの？

「んー、兄ちゃんにはあたしの全てを知って欲しいってゆーかー」

「キモいこと言うな」

「ひぎゃー！」

体をクネクネよじらせる楓子を、俺はもう一度ノートの角で殴った。

どこの世界に互いの全てを知り合う兄妹がいるか。そういうのはカレシ作ってそいつとやれ。こいつの頭は大丈夫なのか？　お兄ちゃんは将来が不安でならん。

「あんたたち、ほんと兄妹仲いいわねー」

ところが母さんにそんなことを言われ、俺は頭痛を起こす。心外にもほどがあった。

「冗談じゃないよ。俺は朝からからまれて、メシも邪魔されて、困ってるの。父さん、何か言ってやってよ」

外見とは裏腹に一家で最も常識人、聖職者である父親に助けを求める。

「うお……」

すると、父さんの額にはいくつもの青筋が浮かんでいた。とつくに新聞は畳んでいた。今までノートに目をやっていたため、気づかなかったのだ。

「ど、どうしたの父さん？」

「一部始終、聞かせてもらったが——」

今度こそ怒り心頭キテるらしい。いったい何が逆鱗に触れたのか。……まさか俺が怒らしちゃったんじゃないだろうな？　こ、こええ。助けて、神様。

「珍しく早起きしたかと感心していれば、徹夜してただけか、楓子……」

あ、俺じゃなかった。よかったあ。

どうも楓子の生活態度について怒ってるらしい。俺は胸を撫で下ろす。

「えー、別にいいじゃん。パパも古カビたこと言わずにさー。もっとフリーダムにフレキシブルに生きようよー」

楓子はアホの子だった。

「ビキビキ」

その物言いに、父さんの額の青筋が数え切れないほどに増える。

もう怖いを通り越してグロい。

「どれ、ワシにも見せてみろ」

ドスの利いた声ですぐまれ、俺は動物的本能のままに強者に従う。テーブル越しにノートを手渡した。

「なるほど、力作だ……」

ノートをバラバラめくりながら、父さんが地鳴りのように唸る。

あれだけの分量の文字を書くかと思ったら、まさしく夜通しくらいの時間は必要だろうな。むしろ、普通はそれでも足りないか？ 速度だけならプロ作家並なんじゃねえの？

「趣味があるのはいいことだ。打ち込めるものがあることは青春に張りをもたらしだろう……」
やおら父さんが立ち上がり、

「だが、自堕落の元となるのなら、こんなもの捨ててしまえ！」
特大の雷が落ちた。

あまりの大量に、家中がビリビリ震える。

俺は「ひっ」とたじろぎ、危うく椅子ごとひっくり返りそうになる。

楓子も目を回す。

母さんだけがいつの間にか耳栓をつけて味噌汁をすすっていた。さすが夫婦。備えがいい。

「まったく、けしからん！ けしからん！」

本気で捨てるつもりなのか、父さんはノートを持ったままドスドスと台所を出ていく。

「いやーやべでー」

音響攻撃から一早く立ち直った楓子が泣きながらとりすがるが、いかせん女の子の体じやな。軽すぎる。黒無双と異名をとる父さんは、歯牙にもかけず廊下を引きずっていく。

「英二はお兄ちゃんなんだから助けてあげなさいよ」

「なんで俺が!? 母さんが窘めればいいだろ? 得意だろ?」

「京平さんもあそこまで怒ると、振り上げた拳の下ろしどころが必要になるでしょ?」

つまりこうか。

俺が体を張って父さんを止める↓父さん、俺を殴る↓怒りが少し収まる↓その隙に説得する……という図式か。

「あんた鬼だ！」

「耳栓つけてるから聞こえませーん」

じゃあなんで会話成立してるんだよ、惚けやがって！

「ああもう、いつも貧乏クジ引かされるのは俺なんだ……」

嘆きながら、俺も席を立つ。

生活態度を改めない楓子こそ拳骨の一発ももらうべきだと思うが、さりとてあれだけ頑張っているものを捨てられるというのは忍びない。不本意極まりないが、そう、これでも兄だ。仲裁してやる義務はあるだろう。義務だから仕方ない。やれやれだぜ。

ため息とともに俺は肩を竦め、二人の後を追った。

段なぐられるぶんぎりというのは、そうそうつくもんじやないよな？
廊下を歩いて追いかけながら、俺おれは後ろから父さんに声をかけた。

「謝るから！ 反省するからノートはやべで」

「楓子の言う通りだ。ちよつと強硬すぎるって」

これで説得できれば……なーんてそんな甘い託

父さんは鼻を鳴らすだけで耳も貸してくれず、その巨体は止まらない。

玄関を出て、境内に出て——その行き先を俺は悟る。

これはもう体を張るしかない。クソッ、覚悟決めるか……。ああ、こえええ！

案の定、父さんは焼き場の前に立って、ノートを高々と掲げた。

投げ捨てるつもりだろう。未だ絵馬の残骸が燃やされている、浄めの炎の中に。

俺は腹を括り、父さんからノートを奪い取ることにした。腰を落として重心を下げ、雄叫び

を上げて勇気を奮い立たせ、父さんの腰の辺り目がけてタックルをしかける。

「うおおおおおおおお」

「だが、楓子。ワシも鬼ではない――」

「しねええええええええええええええええ」

「今日からちゃんと早寝早起きをする」と誓うなら、返してやろう」

「こわくなんかねえぞおおおおお」

「どうだ？——つて、ん？英二？何をしておる？待て！止まれ！」

「タマとつたらああああああああああ」

父さんが何か言ってた気がするが、不退転の決意でタツクル中の俺には聞こえやしねえ。

「くらくらええええええええええええええええ」

ああ、決まったね。会心のタツクルって奴が。

地面に根を張ったような父さんの両足を、ぐらつかせてやったよ。へへ、どうだい？ 俺だってやる時はやるだろう？ ちよつとは見直してくれたかい？

「ば、馬鹿もんがああああああ」

俺のタックルを受け、父さんは思わずノートを放してしまう。

あ、あれ……？

そのままノートは綺麗な放物線を描き、浄めの炎の中に……消えて、いった。

「ぎにゃああああああああああ」

林を切り開いて作った境内に、楓子の絶叫が木霊する。

それはまさに断末魔。

楓子の体が溶けた油絵のように歪んで見える——そんな錯覚が起きるくらい悲愴な声だった。

可哀想だが……そう、覆水盆に返らずって奴だ。だよな？

「おおお……」

父さんが呆然とした顔で浄めの炎をいつまでも見ている。

きつと自分が、やってしまったことに、罪の意識を感じているのだろう。でも、わかるよ、父さん。それでも楓子を厳しく躾けたかったんだろう？ 自分の胸を痛めてでも、悪いことをしたらどうなるか教えたかったんだろう？

うん、わかる。尊重する。だから、炎の中にノートを叩きこんだのは父さんの教育方針の一

環であり、俺は関係ない。ないったらない。

そうだ、兄として妹に何か慰めの言葉をかけてやろう。それがいい、それがいい。

う……でも、いざとなったら気の利いたことが思い浮かばないな。

「ぬう……………」

俺は棒立ちになったままの楓子の肩に置こうと、伸ばした手を宙にさまよわせる。

気を取り直してまた書けよ。今度こそ読んでやるからさ。あ、いや、読むのは嫌だな。どうしようか。俺は読まないけどまた頑張れよ。

……すげー投げやりっぽくて慰めになつてねえ。参ったな……。

そんな風に俺が益体もない思考を頭の中でぐるぐるさせていた、その時だ——

B A O

怪音とともに、突風が吹いた。

「な、何だ!？」

驚愕で、俺はとりとめのない思考から現実へと意識を引き戻された。

絵馬とノートを焼く浄めの炎が、火柱が立つほどの勢いとなって燃え盛っていた。

「何だよ、これ!？」

それはさつき、俺が散々ダメ出した、楓子のノートに書かれた名前だった。

「どういうことだよ……」

メチャクチャ混乱する。

「おのれ、面妖めんような……」

そんな俺と対照的に、父さんはしっかりとロザリンドを見据みえた後、

「英二！ ワシが戻るまで、楓子を守りつつアレを見張みっている！ できるな！」

一方的に言いつけて、大急ぎで家の方へ戻っていく。

「いや、できるなって……どうしろってのよ？」

相手人間じゃないし。空飛んでるし。

俺が弱りきっている間にも、楓子は隣で大はしゃぎしている。

「キヤー！ ロザリンド様のバックに薔薇ばらが見えるうううう」

「見えねえよ。シンナーでもやってんのかよ teme」

俺のツツコミを無視し、楓子はまるで芸能人を前にしたファンのように、しきりに手を振り、投げキッスを飛ばす。

「む……………」

ロザリンドはそんな楓子を空から凝視ぎょうしした後、

「我が名は『紅薔薇の剣姫』ロザリンドⅡジ・ヴァルハランⅡ炎煌！ 死すべき運命を超越さだめし

た天魔なり！ 見ているか、神よ！ その摂理せつりを以てしても、このボクの魂たましいを戒めることなどできはしないのだというこの奇跡を！」

ますますキザつたらしい口調で自己紹介を始めた……。

俺の気のせいかもしれないんだけど——なんかこいつ、楓子の目をバリバリ意識してねえ？ いちいち芝居がかつてるっつーかさ。もちろん自分に酔ってるんだけど、それを見られるのはもつと快感快感みたいなの……。

いや、無論これはただの推測だ。こんな謎の生命体なぞ（？）が何考えてるかなんてさっぱり自信ない。でも、意外と人間臭いような——

と、少しでも現状を把握はあできないかと観察していると、さらに次の異変が起った。

「アハッ、アッハハハハハッ、アーツハハハハハハハハハッ」

炎の中から、正気を疑うほどけたたましい笑い声が撒き散まらされたかと思うと、

「アーツハッハッ。これで死神どももおさらばだわ、ザマーミロ！」

黒いマントで全身を包んだ銀髪の幼子おとこが現れた。

やはりその背にも黒い翼があり、天に駆け上あがる。

「で、出た——————！ 我らのアイドル、キキたんだ——————！」

「アイドル？ 知ってんのか、楓子？」

「キケロクロットⅡナイトメア——愛称『キキたん』でしょうが！」



「でしようがといわれても……」

それも楓子の作り話に出てきた登場人物の名前だよな？ そんならいしかわかんねえよ。

「もう自由よ！ キキは自由だわ！ この力を使って好きなことをしてやる！ 大暴れしてやるんだわ！ アーハーハッハッハ！」

「キキたんハァハァ……」

まだ狂笑している幼女を見上げながら、楓子がうつとりする。かなりシニールな絵だぜ……。

かと思えば――

「き、貴様！ まだボクの自己紹介が終わっていないだろうが！ 終わるまでそこで大人しく聞いていたまえ！」

「なによ、剣姫。どうしてキキがあんななんかにつき合わないといけないわけ？ 三文役者こそ引ッ込んでなさいよ。あんたはキキっていう太陽の前じゃ、月にすらなれないってーの」

「はっ、吸血鬼のくせに太陽とは聞いて呆れるね！ キャラブレだよ、失望だよ」

「ぐっ……このアマあ……」

上空でロザリンドとキキが口ゲンカ始めたし……。

「ああっ、お二人が争ったら、あたしはどっちにお味方すればいいのっ？」

楓子は楓子で小指噛んでるし……。

もう收拾がつかねえよ――って收拾どころの話じゃないな。そもそもこれは何だ？ いった

い何が起こってるんだ？ 乏しい状況証拠から推理すれば、だ。

「おい……まさか、楓子のアホ妄想が現実になってんのか……？」

いや、待ってくれ。聞いてくれ。俺だってわかってんだよ。

自分で言ってる信じられないんだよ。

でもさ、その俺の常識を嘲笑うように、三体目の堕天使まで現れやがったんだよ……。

「あらあら、これは本当にまあ。こんなことあっていいのかしら」

三体目は、目も覚めるような青色のチャイナドレスを纏った美女だった。

しかも……そのお……おっぱいが超デカイ……。

この期に及んでどこ見てんだって？ しょうがないんだよ！ 事情があるんだよ！

だってこの三体目のチャイナドレス、胸元に菱形の隙間が開いてるんだ。深い谷間を強調するためのデザインだよ。肌が見えちゃうんだよ。あけく、

「ふう、現世の夏はこんなに暑かったかしらねえ」

とか言いながら、その隙間に指突っ込んで、バタバタ煽いでんだよ。巨大なおっぱいがバインバイン悩ましげに揺れるんだよ。

俺だって思春期の男子なんだ！ 一瞬目が釘付けになってもしょうがねえって！ 全部見えちゃわないかなって期待してもおかしくねえって！

「あら――」

その俺のいやらしい目線に気づかれてしまった……。

「あらあら、わたくしつたらはしたない。ごめんなさいね?」

青チャイナさんは頬を赤らめながら（それがまたそえる!）、黒い翼を広げて上空に昇っていく。勢いよく飛びだした最前の二人と違い、何だか申し訳なさそうに。

うわあ。うわああああ。

もうね、変な目で見て申し訳ないのはこつちだよ! 気まずいったらねえよ!

見ず知らずのお姉さん、ごめんなさい! 謝ります!

「アイシャリア姉さまの上乳眼福だあウエへへへへへ」

テメエは俺以上に恥ずかしいな、楓子。

「涎拭けよ」

楓子が陶然として青チャイナさんを見つめたままなので、仕方なく俺がハンカチで拭ってる。自分の涎を拭いた後で。

「うふふ、これで念願の同人誌作りができるわ。でもまあ大変、どうしましょう。わたくし、やり方がよくわからないわ。お二人はどうですか?」

青チャイナさんが上空の二人のところへ行き、声をかける。

「遺憾ながら力にはなれないな、レディ。ボクは読む方専門だ。作る方は詳らかではない」

「そんなもん、専門家を捕まえて協力させればいいのよ。キキならそうするわ」



すると、さっきまで一触即発ムードだったロザリンドとキキなのに、青チャイナさんを交えてまるで井戸端会議みたいなノリで話し合います。

「読む方専門ですか。いいですねえ。わたくしも先に思いっきり堪能しようかしら?」

「そうとも! もう誰かの後ろから覗かなくても、存分に漫画を読めるんだよ!」

「ふーん、海妃の好きにすればいいけど、夏コミに参加するつもりならスケジュール的に切羽詰まってんじゃない?」

「あらあ、そうですなえ。弱りましたねえ」

青チャイナさんが現れた途端、急に空気がほのぼのとしてしまった。調子狂わされたぜ。

それに、だ。……同人誌? ……漫画? ……夏コミ?

およそ堕天使という超常の存在が口にするには、相応しくない単語だろ? 誰だって戸惑わずにはいられねえよ。

だから、俺は楓子に聞いたのだした。

「なあ、あの同人誌がどうか言ってる青チャイナさん——アイシャリア? ノートにあった『わだつみの海妃』のことなんだよな?」

「うん、兄ちゃん。あれくらいスリットの深いチャイナドレスだとね、普通のパンツじゃ見えちゃうの。だから際どいくらいのヒモパンじゃなきゃダメなんだよ」

「そんな質問してねえよ」

俺はツツコミ代わりに足蹴^{あしげ}にしたが、

「ウエヘ。ウエヘへへ。痛くない。痛くないよう」

楓子は陶然としたまま下から——つまりイケないアングルでチャイナドレスの身を覗いていた。

おまわりさん……早くこいつタイホしてください……。

ちい、肝心のこいつがこのザマじゃあ、聞けるものも聞けねえぜ。

いったいあの連中は何なのかとますます謎が深まり、俺が目を白黒させていると——



とうとう四体目まで現れてしまった。

クソッ、際限ねえぜ、こりゃあ……。

騒々しい先の三体と打って変わり、四体目は重苦しいほど無口だった。

それはいいのだが、炎の中から飛びだすなり一直線にこっちへやってきて、俺は肝を潰^{つぶ}しそ
うになる。

「な、なんだよ……?」

これまた美貌^{びぼう}の墮天使だった。整いすぎて、かえって個性がなく印象が残らないという不思議な美しさ。

恐らくは、万色にして無貌^{むぼう}の天使ナーシエだろうか。

そのナーシエが物言いたげな目で見つめてくる。

「っ……」

唐突^{とうとつ}に胸に痛みを覚え、俺は手で押さえた。何かの攻撃を受けたのかと思ったが、違った。急に、すっげー悲しくなったんだ……。

「ど、どうしたんだよ? なんでそんな顔するんだよ?」

ナーシエの表情がとてつもなく悲しげだったから、俺にまでその気持ちが移ってきちゃった
感じだ。ああ、なんかもらい泣きしそう。せつなくなるほど、胸が痛^{いた}えよ。

不意にナーシエが俺に触れようと、そつと手を伸ばしてきた。

「ひっ」

俺は反射的に避けてしまった。相手が何を考えているかわからないんだ。当然だろう?

でも、ナーシエの表情がますます深い悲しみを帯びてさ……。

俺はえもいわれぬ罪悪感に囚^{とら}われちゃった。

「……………」

ナージェは悲しげに顔を伏せたかと思うと、最後まで無言で天へ飛び去った。
次から次へ——もう何が何だか分からねえ。

ともかくこれで四体、楓子のノートに書かれた妄想の産物が具現化された。

しかし、なんでもいきなり墮天使たちが具現化されてしまったんだよ？

俺はいつたいどうすりゃいいんだよ？

周回するように天を舞う彼女らを見上げながら、俺はひたすら無力感を味わう。

そこへ——

「待たせたな、英二！ 楓子！」

家で戦う準備をしてきたのだろう、父さんが戻ってきてくれた。

「悪霊退散！」

浄めの塩（ぶっちゃけ台所にある伯方の塩）を撒く父さん。

さすがは神職。さすがは豪胆で知られる男。顔が怖いのは伊達じゃねえ。この怪異の前に一歩も怯まない。頼もしいぜ。俺は改めて父の偉大さを知る。

「祓い給え！」

「さて、諸君。無事転生を果たした我らの、とるべき道を協議しようではないか！」

「浄め給え！」

「フン、仕切らないでよ、劍姫。キキは好きにやるわ」

「祓い給え！」

「そうですねえ。元々は縁もゆかりもないのですし、各自別行動をとりませんか？」

「浄め給え！」

「……………（無言で首肯）」

「悪霊退散つ、ハア——！」

「よからう、諸君。ならば卿らの武運長久を祈る」

……気のせいか、全然効いてなかった。

父さんが顔を真っ赤にして塩を撒いても、墮天使たちは痛痒も感じてなかった。
要するにまるで相手にされてない。

「このダメ親父！ 不信心者！」

「なにおう!？」

思わず俺は口でツツコミ、お返しに父さんの拳でツツコミまれる。

クソツ……死ぬほど痛つてえ！ よくもやりやがったな！

「普段偉そうにしろって、いざとなったらまるでダメじゃねえか！ 感動して損したわ！」

「この罰当たりが！ いいから黙って見ていろ！」

「罰当てるなら、あいつらに当ててみるっつーの！」

「よし、いいだろう。その減らず口を後悔させてやるからな！」

いつもの父さんなら、俺の剣幕など子犬に吠えかけられたが如くあしらう。でも、父親の權威失墜の危機と自覚あるのか必死だった。

状況を顧みず親子ゲンカをすることしばし、墮天使たちは笑いながら徐々にその高度を上げていき、空の彼方へと消える。

「いやー！待ってへー！ー！」

悲劇のヒロインのように楓子が天に届かぬ手を伸ばしていたが、俺と父さんは無視。

「そら見たことか！ ワシの浄めの力が勝ったわ」

「嘘つけ！ 逃げられただけじゃねえか！」

「嘘ではない！」

「じゃあ、俺の目を見て言ってくれよ！」

「ギロリ」

「やめて、殺し屋みたいな目で睨まないで、ごめん父さん！」

罽とメンチの切り合いで勝てる人類なんかいるの？ 俺は速攻 土下座して謝る。

父の權威復活。てか、俺がどうかした。見境なくしてた。この人に向かって暴言吐くとか、自殺志願者かつつの。俺の人生設計では八十まで生きるんだよ。孫に囲まれて死ぬんだよ。

「しかし、このワシのお祓いが効かんとは、いったい何者……」

「やっぱ効いてなかつ……いえ何でもないです。ないです」



再び睨まれ、俺は地面を覆う玉砂利に額をこすりつける。

「ううう、皆いなくなっちゃったあ……」

隣でも楓子がガックリ泣き崩れた。

「いや、そこは喜ぶところだろ」

とりあえず何をしでかすかもわからない異常な連中が去ってくれて、俺はほっとしてるぜ。

「はっはっは、ワシの浄めの力に感謝せい」

「うー、パパのバカあ」

「ほらもう楓子、グズってないで。諦めろよ。な？」

俺は先に立ち上がり、楓子を宥めて手を差し伸べる。

一時はどうなることかとヒヤヒヤしたが、脅威が消えた解放感からいくらでも優しくなれる。

「帰って、母さんの茶でも飲も——」

ギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャギャ！

それは黒板を引っ掻く音か、はたまた悪魔の産声か。

いきなり耳障りな音が響き渡り、俺たちは耳を覆った。

「なんだよ！ 今度はなんだよ!? まだ終わってなかったのかよ!?!」

もう泣きたい。いや、妹が見てなかったら、多分泣いてたよ。
耳障りな音に合わせ、まだ収まっていなかった火柱が悶えるように歪み、渦巻き、螺旋と
なつて天を衝く。

火柱の上——まるでそれが固体であるかのように立つ、少女の姿がそこにあった。

「また堕天使か……？」

悪魔の産声とともに現れた少女——俺の肌が粟立つ。

「……いや、違う？」

新たに現れた少女の背中には、純白の翼が見えた。

そう、漆黒ではなく純白だ。つまりは、聖天使の証ってことだよな？。

身にまとう鎧の色も白。ただし、重厚なものではなく、まるで水着のように表面積が少ない。
ゲームに出てくる女戦士が着ていそうな鎧。白い肌とコントラストがついてなくて、かえって
艶めかしい。まして体のラインにはメリハリがついているから一層。

でも、俺の視線をとらえてやまなかったのは、その肢体ではなく顔の方だった。

「……楓子？」

五体目の天使の顔は、どこからどう見ても妹そっくりだったのだ。

それで、はつとなった。楓子のノートの記述を思いだした。

主人公格である女神の聖天使の項目に、「ぶっちゃけ、あたしそっくり」とあったよな？

「あんたが……女神の聖天使メーブル？」

「ええ、そうよ」

聖天使がフワリと地に降り立ち、翼をたたむ。かと思うと、こちらへ歩み寄ってくる。

「助かった……」

どういう現象かは知らないが、ともかく妹のノートに書かれたイタい設定が現実となった。
ならこの聖天使は正義の味方で、あの逃げた堕天使たちを追ってきてくれたのだろう。

後はこの妹そっくりの天使に任せておけば、万事OKというわけだ。

そのはずなんだよ……。

なのになぜ、俺の鳥肌は消えないのか。背筋がゾクゾクするのか。

友好の証であろうはずの聖天使の笑顔が、どうしてこうも恐ろしいものに見えるのか……。
うう、もうやめてくれよう……。ほんとに泣くぞ……。

なんて考えてたら、いきなりキスされた。

「む……」

とんでもなく唐突の事態だったので、反応が遅れる。

「なにやっとなじや……」

楓子が隣で非難の声をあげる。

「ちよつ、ちよつと何やってんのよ、あんた!? あたしの兄ちゃんに何してくれてんのよ、あ

んだ!? バカなの? 死ぬの? きいいいい、いいから今すぐ離れなさいよ!」

何を取り乱しているのか、髪を振り乱しながらぎゃあぎゃあ騒いでいる。

しかし、聖天使はそんな罵声はどこ吹く風で、愛の行為に没頭している。

俺は頭が真っ白になって何も考えられない。

ちゅぱっ、と音を立てて聖天使の唇が離れていった。唾液が糸を引いて、お互いをつなぐ。

聖天使がそれごと自分の唇を手の甲で拭う。はしたない仕種が恐ろしく妖艶だった。

「気持ちよかった?」

訊かれても俺は事態についていけず、感触も余韻も楽しむ暇はなかった。舌を入れられたのか入れられなかったのかも思いだせない。

「妹とキスした……妹とファーストキスした……」

どころか、今の俺は精神崩壊を起こしかけていた。

「ククク、今日のところはこれで我慢ね? 続きはまた今度、たっぷりしてあげるわ」

そんな俺におかまいなしに、聖天使は光の剣（ガンダムのビームサーベルみたいな奴）を抜き放ち、楓子に突きつけた。

「大丈夫よ、麻痺モードにしているから。チクつとすることで死にはしないわ」

それを見て、怖い台詞を聞いて、俺はようやく正気に戻る。

正常な判断力を取り戻したからこそまた混乱する。なぜ楓子が狙われているのか? 聖天使



は正義の味方ではなかったのか？ 考えれば考えるほどわけがわからない。

答えが出せずに立ち尽くす俺の代わりに、楓子を守ったのは父さんだった。

「ワシの娘に手は出させん！」

不意打ち気味に髭バンチ炸裂。^{さく裂つ} 聖天使の体が風船のように飛んでいく。「殴った方が強い

じゃん！」と、ツツコミ入れている？

しかし、聖天使も然る者^{もろ}だった。

「オジさんの強さを忘れていたわね。生身で受けたらいかに私でも危なかったわ」

くると宙返りして体勢を立て直すと、着地して不敵に微笑^{ほほえ}む。

その全身が、目を刺さない薄^うつすらとした輝きで包まれている。

ダイヤモンドダストってあるじゃん？ 氷の結晶が降るんだっけ？

聖天

使の周囲にはそれに似た、光の結晶が降り注いでいるように見えた。

「え、【天使の羽衣^{エンジェルウイング・オーラ}】キタロー」

「知ってるのか、楓子？」

「あたしたちと大して変わらない肉体構造を持つ天使たちが、激しい戦闘にも耐え得るようにまとう光の結界なの！」

よく舌も嚙まずにスラスラ言えるな……。変な感心しちまうぜ。中二病患者ってすごい。

「え？ じゃあ、あの普通に着てる鎧の意味は？」

「鎧なんか飾りにすぎんです。偉い人にはそれがわからんのです」

「偉い人って誰だ？」

「兄ちゃん、今の台詞は様式美^{せりふみ}なんだから、素^すでツツこむのは無粋^{ふすい}だなあ」

「いいから日本語で喋^{しゃべ}れやー」

俺は左手で楓子の前髪をかき上げ、右手でデコピンした。

「ひびー！ 気に入ってるのにー！ー！ー！」

「知るか」

一言で切り捨てる。

兄妹漫才^{きょうだい漫才}をしている間にも、

「ぬおおおおお」

父さんが聖天使に追撃を加えていた。

「フン！ フン！ フン！ フン！」

タイソンばりの右フックを叩き、アーネスト・ホーストもかくやの左ハイキックを打ち込み、

グレート・ムタの全盛時代を髣髴^{ほうふつ}させるシャイニングウィザードを決めた。

常人なら四回は殺せそうな猛攻撃だ。

「ククク、無駄ね、無駄」

だが、【天使の羽衣^{エンジェルウイング・オーラ}】に守られた聖天使はまるで無傷だった。バケモンか、こいつ……。



「ぬうう、本当に効かぬようだな」
 蘭ざしりする、父さん。

知らない人が見たら、絶対にこつちが悪役だと思うだろう物騒な表情だぜ……。

「じゃあ、そろそろ私からも遊んでさしあげなくてはね？」
 いや、聖天使も負けてなかった。獲物を前にした蛇のように、且つ妖艶に舌舐めずりする。
 てかそれ洒落になつてないんですけど……。

楓子のノートに書かれた記述、荒唐無稽な技の設定の数々が俺の脳裏をよぎった。

あれが本当に現実になるのなら、父さんが人類最強レベルと仮定しても瞬殺される。

いや、【天使の羽衣】だって実際に使ってみせたのだから、当然他の技だって使えるだろう。
 「参るわ、オジさん」

マズイ。父さんがピンチだ……。

どうする!? どうする!? 俺、どうする!? 何ができる!?

うう、泡食うことしかできない、情けない俺。

「お待ちなさい!」

しかし、やはりというか、こういう時に駆けつけるのが――

「お待たせつ、あなた。着替えに手間取ったわ」

「か、母さん!」

内助の功つて奴なんだろうな! 絶妙のタイミングで、巫女服(意外と着付けが難しい)姿の母さんが来てくれたよ!

「ふふん、優子さんが来れば百人力よ」

「行くわよ、あなた!」

母さんが浄めの塩(台所からとってきた)をバラ撒く。

「祓い給え!」

するとどうだ、聖天使を覆っていた【天使の羽衣】が煙のように消えていく。

「……なによ……これ……!」

今まで不敵に笑っていた聖天使の笑みが凍りつく。

「ワシの優子さんは靈感バリバリだからな!」

父さんがフンヌウと闘気のこもったパンチを放つ。

「くうっ、まずい……」

直撃したらタダじゃすまないと見たか、聖天使が素早くかわした。さらにはそのまま父さんの拳の届かない空へと退避する。

「オバさんまでこんな力を持っていただなんて、本当に人間かしらこの夫婦」
 毒づく聖天使。俺も正直自信ないッス。

「チ。面倒な奴も来るし、今日のところは見逃してあげる」

楓子、次いで俺と順に流し目を送り、聖天使が翼を広げる。その体がフワリと浮いたかと思うと、ロケットのような速度で空の彼方に消えた。

「ハッハッハ、見たか、ワシら夫婦の無敵っぷりを！」

勝ち誇る父さん。

「あなた、かつこよかったわ。ちゅ」

抱きつく母さん。

「ま、待ちなさい！ 神聖な境内で破廉恥はいかん！」

「うふふ、じゃあうちに行く？」

ナニ考えてんだが、いちゃいちゃしだすし。

「ううう、メーブルたんにもフラれたあ……」

楓子は楓子でハンカチ嚙んで泣き崩れるし。おまえ、剣突きつけられたの憶えてねえの？

とにかく――

「皆、しっかりしろよ！ さっきの聖天使の台詞聞いてなかったのかよ!？」

俺は我慢できなくなつて叱咤する。

聖天使は去り際言つただろうが？ 「面倒な奴も来るし」 ってよ！

うう、イヤな予感しかしねえ……。

それでも俺は勇気を出して、そおーつと未だ燃え盛る浄めの炎を見やる。

炎が爆発的に膨れ上がり、一層巨大な火柱と化していた。

かと思うと、急激に一点に収束した。

あれだけ轟々と燃えていた炎が、余熱すら残さず消しとんだ。

そして、跡には一人の少女が残った。

可憐な容姿に不似合いな無表情。服は上下黒ずくめ。背中には黒い翼とバカでかい鎌。人ならざる青い髪は癖っ毛なのかあちこちはね、うなじで一房にまとめられて尻尾状に垂れている。右手にあるのは妹のノート。ところどころ焦けてはいるが、なぜか無事だった。

そのノートに書かれた設定によれば、妹が空想した天使の数は六。

今、俺が目にした天使の数は五。

つまり、この黒服の少女が最後の一。

ってことは――

「見たものを全て殺さねば気がすまない、殺戮の天使……」

俺は独白し、恐怖のままに瞠目した。

隣の楓子と抱き合つて震えた。

「次は貴様かああ」

頼みの綱は両親だ。母さんの清めの塩によるバックアップを受け、父さんが突撃する。

「うわははは、くらええええええい」

両手を組み合わせて、大きく振り上げる父さん。

「オ、オルテガハンマー出たー！ー！」

何それ、楓子。強いのか？

「ただでさえハンマーのようなババの拳骨を、二つ重ねる大技よ！ 見て、兄ちゃん！ さらに威力を上げると二つの拳をより高く振り上げてるでしょ!? それによつて位置エネルギーも高まり、一気に叩き下ろすことで運動エネルギーに変換させるわけなの！ 力学に基づいた合理的な体の使い方って奴なの！ 両の拳がこれからどれだけの破壊力を生むのかと思うと、あたしは手に汗握らずにいられないよ！」

「なるほど、合理的か。いいな……」

スゲエよ。

いや、父さんみただけど、おまえの知識も。え？ 中二病患者って皆こんなすごいのか？

ともかく、どれだけすごいかは、よくわかった！

父さんはまだまだ足らぬとばかりに、両拳を高く振り上げる。

さらに高く、高く、全身を伸ばして振り上げ――

ゴギン。

あ、なんかイヤな音がした。

「ふおおお腰がああ腰がああああああ」

父さん、ギックリ腰が持病なのにハッスルするから……。

あーあーあー、あんなに地面をのたうち回っちゃって……。

体を一気に伸ばしたら、腰に突発的な過度の負担を与えてしまうから厳禁って、いつも自分

で言っただけだった？

「あなたああああ」

母さんも傍に駆け寄り、腰をさすって看病を始める。

「なんだかなー……って呆れてる場合じゃねえだろ、俺！」

助けなし。

「……………」

殺戮の天使が自爆した父さんから視線を移し、俺はじろりと睨まれる。

ターゲット決定か……。

「おい、逃げよう」

俺が声をかけるも、楓子は微動だにしない。

「いや、怖いのはわかるけどさ。俺も同じだけどさ」

普段生意気でもそこは年端もいかない女の子のことだ。

足がすくんだって笑やしないよ。でもな？

「おい、しっかりしろ。走るんだ。できるだろ？ 大丈夫、父さんと母さんなら自力で何とかする。だって俺たちの親だもの」

このままでは殺されるので、俺は楓子に懸命に発破をかける。

「う……うへへ……えへ、えへへへへへへへ」

「おい……どうした……？」

猛烈に嫌な予感が強くなりつつ、恐る恐る楓子の顔を見る。

目がイッてた。

表情が恍惚と蕩けていた。

「もう逃げない。ううん、もう逃がさない。ロザリンド様もキキたんもアイシリア姉さまもナーシエたんもメープルたんもみーんな逃げられたけどマリシエルたんは、マリシエルたんこそはあたしのもの。ああ、天はあたしを見放さなかった。もう一度チャンスをくれた！ なんだろこれ、神様のクリスマスプレゼント？ 今、夏だけど。うち、神社だけど。ううん、そんなのどうだっていい！ あたしのマリシエルたん！ あたしのマリスたん！ ああ、マリスたんが俺の嫁すぎて困るよ！」

俺は思いつきり楓子に頭突きした。

「おまえの頭に巣くう蛆の方が困るわ！」



「握手してー！ ハグしてー！ あたしにもキスしてー！」

全然堪えてなかった。

どころか、このバカ妹は殺戮の天使に向かって駆け寄ろうとするので、俺は必死で羽交い締めにした。

「いや、そんな場合じゃないから！ ほら逃げるぞ！」

「あたし、もう死んでもいい！」

「アホか、死んでたまるか！」

「兄ちゃん、私と一緒に死んでー！」

「嫌だあああ。少なくとも妹とは嫌だあああ」

兄妹漫才をやっているうちに、殺戮の天使マリシエルは俺のすぐ傍までやってきていた。背中にある身長より長い大鎌の柄を、ずりずり引きずりながら。

「命だけはお助けを！」

無駄でも何でも命乞いする俺。

笑うなら、笑え。でも俺は断言するね。今の俺と同じ立場になったら、誰だってそうするね。でも、心はもう半分諦めていた。

ああ、俺の人生って短かったなあ。どうせ死ぬなら勉強なんかせずにカノジョ作ればよかったなあ。妹ウザかったなあ——そんな想いで大半が占められていた。

「……………」
殺戮の天使が感情の見えない、透明な瞳を向けてくる。

いよいよ年貢の納め時か。父さん母さん、ごめん。せめて楽しい走馬灯見たかったな。

「でも、おまえだけは逃げる」

俺は観念し、死力を振り絞って楓子を両親の方に突き飛ばす。

さらには殺戮の天使を抑え込むため、跳びかかった。

「兄ちゃん、そんなのだめえ！」

楓子が悲痛な声で哀願する。

この妹はなんだかんだで兄を案じてくれる。だからこそ、俺は聞かない。

仕方ない。他に術がない。やれやれだぜ。

「かかってこい！ 俺が相手だ！」

この身を賭してせめて時間稼ぎをせんと少女にタックルし、押し倒す。

さっきはあの父さんにだって向かっていったんだ。殺戮の天使なんざどうってことないね！

「あ……」

すると、殺戮の天使が声ともいえないような吐息（しかも妙に色っぽい）を漏らした。

だが、俺はそんなものに気をとられる余裕はない。

小柄で軽いからか、その体格に不釣り合いな大鎌を背負ってるせいでバランス悪いからか、

押し倒すまでは簡単だった。しかし、殺戮の天使も抵抗してきて、二人で揉み合い、体がもつれ合い、俺もとりおさえるために玉砂利の上だという痛みさえ忘れて暴れる。

無我夢中だったから、何をどうやったかはわからない。ともかく俺はマウントポジションをとった。少女に馬乗りになって、両足で細い腰をガッチリ抑え込んでやった。

「う……」

そして、俺は当惑する。

初めて、殺戮の天使の顔を間近から見ると予想以上に――

「か、可愛い……」

と気づいたのだ。胸がドッキンコ、ドッキンコと高鳴るほどに。

人形のように整った、無表情の美貌。しかし、人形ではないことが傍で観察するとわかる。震える長い睫毛。白い肌の下に透ける赤い血。蕾のような唇からは甘い吐息が漏れる。

「ゴクリ」

と、喉を鳴らしてから、俺はぶんぶん頭を振って目を覚ました。

こいつは敵だぞ、って自分に言い聞かせた。

「お、おまえもなんとか言えよ……」

強がり、殺戮の天使を睨みつける。

殺戮の天使もじっと俺の方を見つめたまま。

「言えつてば……」

すつ、と少女の口が開いた。

「え？」

左手でわしづかみにしていた。

「ごめんなさい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい」

少女はどけてと言ったくせに、逆に抱え込むように両手を重ねてくる。

「うあ……あ……」

結婚前にこんなことしちゃいけないのに。むしろ俺たち恋人ですらないのに。でも気持ちいい。

清い心と煩惱ほんのうで、胸が二つに裂けてしまいそうなほど俺は苦悩する。

「……大胆な人」

「……そして、**勇気のある人**」

なぜか敬語になっている。それくらいパニックっている。

「痛つ」

「……仮《婚約》エンゲージ完了」

「んなつ……」

俺は自由になった左手の、痛んだ部分をまじまじと見つめた。

いったいどういう魔法か、小さな黒い痣ができていた。

「……逃げた五体を捕まえるため、《婚約者》が欲しい」

何を言っているのか、よく理解できなかった。

「は？」

「……聞こえなかった？ どうか私に協力して欲しい」

言葉だけでは足りないかと殺戮の天使が、仰向けのまま器用にぺこりと頭を下げる。

つまりそれは要するに――

「殺さないの？」

「……誰が殺すと言った？」

おずおずと尋ねる俺に、彼女は即答する。

言われてみると……気づいたわけよ。

確かに俺たちはこの子に襲われたわけじゃない。むしろ早合点して襲った側だ。

「……不合理な理由で殺しはしないわ」

「そ、それはよかった……んかな……？」

色々なことが一度に起きすぎて、そのたびに驚かされて、疲れて、もう何もかも億劫だった。

もういつそ寝てしまうか？

ってなことを考えて、寝たら勉強できないじゃないかと思ひ直す。

ああクソ。命が助かった途端、学校のこととか成績のことが頭をチラつきだした。

俺って小市民すぎだろう……。

第三幕 (殺戮の) 天使がうちにやってきた!

ヒイヒイ言いながら動けない父さん(体重〇・一トン)を寝室まで運び、俺は居間に戻った。すると、台所でお茶の準備をしていたのだろう、お盆を持った楓子と廊下で出くわす。

「う……」

思わず立ちすくんでしまう、俺。

「兄ちゃん、どうしたの? あたしの顔になんかついてる?」

「いや、何でもない」

とか言いつつ、俺はさりげなく目を逸らす。

ヤバー、頬が熱いよ。落ちついた気分で改めて妹の顔を見たら、思いだしちゃった。

ついさっき、瓜二つの顔でキスされたのを。

我ながら最悪のファーストキスだぜ。トラウマになって夢に見たらどうしてくれんだよ。妹とキスとか恥死レベルだろ? 間違いない悪夢。

ああもう最悪だ。ほんと最悪だよ。何で顔がどんどん熱くなってるんだよ。マジ最悪だよこれ。最悪だよ、な?

……………。

……………でもなー。

「……ちよつと、もったいなかったかも」

もつと感触を楽しんでおけばよかった。顔はアレでも中身は別なんだし。

「? 兄ちゃん、何か言った?」

「な、何でもねえよ!」

アップネ、世迷言を聞かれてなくてよかった。

「パパの様子どう?」

「今日のは大分痛みがひどいらしい。白目剥いてた」

「うわ……」

「母さんに看病頼んできた。で、それ、あいつに出すの?」

「ウヘヘ、あたしの淹れたお茶がマリスさんの唇に触れて、マリスさんの口中を蹂躪して、マリスさんの喉に侵入して、マリスさんの胃に溶けて、マリスさんの一部になるなんて……想像しただけでウツトリしちゃう」

「気色悪い想像するな……」

俺は変質者を見る目で妹を白眼視した。

「おまえ、バレンタインのチョコに自分の髪の毛入れるタイプだろ?」

「ギクリ。何でわかったの？」

「去年の義理チョコ、食べなくて正解だったわ……」

「ぎ、義理じゃないもん！ それに食べずにどうしたのよ！」

「クラスの湯川君が物欲しそうにしてたんであげた」

「捨てられた方がまだマシだ！」

妹の抗議を聞き流し、俺は襪を開けて居間に入る。

実はちよっとおっかなびつくり……。

十二畳の和室に年季の入った座卓が置いてあり、そこに殺戮の天使が正座している。

あー、こいつともさつき桃色アクシデントが起きたわけだが、別にゴニョゴニョの手触りを思いだしたり、名残を惜しんだりはしなかった。

なにしろこいつは可愛い少女のナリをしてても、その実恐ろしい力を秘めたモンスターだ。しかも、何を考えているかわからねえ。いきなり襲ってくるようなことはないみたいだが、爆発物のように慎重に取り扱う必要がある。そう思うだろう？

「お待たせ」

俺は座卓の対面に腰を下ろす。そうしたらバカ妹が殺戮の天使の隣に行こうとしたから、引つ張って俺の傍に座らせる。こいつは蜂の巣を好んでつくタイプだな、まったく……。

「粗茶でございまーす」

楓子が湯のみを配り、急須から茶を汲んだ。

冷たい麦茶の方がありがたかったな——って、待てよ。

この堕天使、茶なんか飲むのか？

「……ありがとう」

迷わず飲んだ。

「……熱っ」

しかも舌を火傷してた。

「……………」

顔は無表情のまま、口を手で押さえて悶えていた。

「……………弱すぎだろ」

俺は呆然としすぎて、思わず本音を漏らした。

え？ 飯にも堕天使だろ？ お茶で舌火傷ってどうなの？

あ、そういやさつき楓子が、肉体的には俺らと変わらないとかどーとか言ってたっけな。

「……何か言った？」

ジロリ、と堕天使が睨んでくる。

「ハイ？」

それは、いきなりだった。

「やっぱこええよ、こいつ……」
 さすがは堕天使だぜ。迂闊な発言は避けよう……。俺はもう肝に銘じたぞ！
 「ん？ そいういやあ——」
 堕天使と言えば、今更ながらに気づいたんだけど。黒い翼が消えてるな？ 大鎌も見当たらないし。あれってシンボルのなもんじゃないの？
 「……あれらは必要な時だけあればいい。それ以外は邪魔」
 へえー、消すことができるんだ？ 折りたたむとかじゃなくて。
 便利なものだな。ちょっと感心したよ。マジで。
 「えーっと、マリシエルだっけ？」
 「……マリスでいい」
 か細い声で、ぼそぼそと喋る殺戮の天使。
 「オーケイ、マリスね」
 正直、助かる。マリシエルって微妙に長くて呼びにくいわ。
 「俺は英二、こっちはデコ助」
 「デコ助じゃないもん！」
 「……よろしく、英二。デコ助」
 「ちよつ、真に受けてる!？」

堕天使のうなじで一房にまとめられた尻尾状の髪が、ニョロリと伸びた。
 それはまるで宙を這う蛇のように襲ってきて、俺の首にニョロリと巻きつく。
 「……何これ？」
 「で、出たー！ マリスさんの【鋼糸鑒陣】だー！」
 「し、知ってんのか、楓子？」
 「そりゃ、あたしが作った設定だもん」
 ……そりゃそうだ。
 「マリスさんは自分の髪に殺戮の魔力を込めることで、その一本一本を強靱な刃に変え、しかも自在に動かすことができるんだよ！」
 や、やいば……？ じざい……？
 言われてみると、この髪フツーじゃねえ。なんつうの？ 冷たい鋼線みたいな……。
 いつでもスパツといかれそう……。
 「……弱いとか言った？」
 「すみません、言ってます」
 俺は迷わず座卓に手をつき、額をこすりつけた。
 「……そう」
 堕天使の髪の毛がシュルリと元に戻る。ふひー、勘弁してくれた。



むしろ、何で通じるんだよ、俺？ ……って感じだけだよ。血つてこええ。

「とにかく、いったいぜんたい何が起こってるのか、こっちゃさっぱりわかんないんだ。その辺、教えてくれると嬉しいんだけど？」

通じたところで楓子の質問はどうにもまどろっこしく感じたので、俺は一気に核心を衝く質問に変えてみた。

恐ろしい殺戮の天使だが、幸いコミュニケーションはとれるようだ。背中に取扱説明書が貼つてあるわけでもなし、相互理解を深めて接し方を知ろうと俺は努力に走ったわけだ。

「……私もレクチャーしたいと思っていた」

「悪い、急に聞きたくなくなった」

——で、すぐに後悔した。自分の失態に気づいた。クッソー、藪蛇じゃんか、これじゃ！ あんな大事あつたら、つい究明してしまいたくなる人の業がつ。業が悪いんだつ。

こんなバケモノ、適当にあらって速攻追い出すべきですね！ ですね！

なに自分から首突つ込んでんの、俺？

「……一言でいえば、私は死神」

しかもこの殺戮野郎、俺の嘆願を無視して話し始めやがった。

「……私の役目は死を受け容れられず、成仏できない幽霊を捕まえて、あの世へ送ること」

「捕まえて？ 説得してじゃなくて？」

愛してやまない存在（自分の妄想まんまだし）にデコ助と呼ばれ、楓子は涙目になる。

ごめん、俺がしかけといてなんだけど、笑えたわ。

「……じゃあ、何と呼べばいい？」

「楓子でいいよ。メーブルだったらもつといいな」

「……？」

マリスが小首を傾げた。楓子の複雑な心情というか機微が理解できないのだろう。まあ、でさんわなあ。俺もできんし。

「楓子でいいよ、楓子で」

「……わかった。よろしく、楓子」

だから俺が助け船を出してやり、マリスが了解する。

「ハイハイハイ！ 自己紹介が終わったところで、マリスさんに質問があります！」

楓子がズビュッと元気よく挙手する。

「マリスさんはほんとにあたしのマリスたんなんですか!？」

「……？」

質問の意味がわからないのだろう、小首を傾げるマリス。

うん、普通はわかんないよね。多分、楓子は「自分のノートに書いた設定が本当に現実化したのか？」と訊きたいんだろう。

「……無理矢理」

俺は楓子を抱いて、壁際^{かべぎわ}までズザッと逃けた。

「く、く、く、来るなら来い、死神! おまえなんか怖くないんだからな!」

「……繰り返し返す。私の仕事は幽霊を成仏させること。生者のあなたたちを殺すことではない」

「あ、そうなの?」

俺は額の汗を拭^{ぬぐ}って、楓子と一緒に座布団^{ざぶとん}の上に戻った。ビビらせないよなあ。

「……そして、幽霊となつてさまよう者はとても多い。私たちの仕事は絶えない」

「わかる気がする。死んだからって納得できそうにないよなあ。俺だったら『もしかしたら生き返ることができるかも?』とか考えそう」

「……中には何十年、何百年と私たちから逃げ回る幽霊もいる」

「ハハ、往生際^{おとしようぎわ}の悪さもそこまでいけば特技だな」

「……笑い事じゃない」

「すみません」

またもマリスの【鋼糸^{かみ}罫陣^{けいじん}】が首に巻きついて、俺は即謝^{すぐ}った。

こええよ。こいつ死ぬほどこええよ。関わるんじゃないかったよお。

「てか、生者は殺さないんじゃないのかよ!」

舌の根も乾かないうちに反故^{はご}しやがって。

「……これも最初に言つたはず。不合理な理由で殺しはしない、と」

「合理的な理由があつたら殺すのかよ!」

俺は震えあがつたね。失言^{しつごん}、粗相^{そそう}の類には気をつけようと決めたね。

「ほへー。死神^{しに}って実在^{じざい}したんだ。かつこい!」

隣で楓子がガキみたいに(まあこいつはガキだが)瞳^{ひとみ}を輝かす。

「でもさ、あたしはてつきりマリスたんはマリスたんのかと思つてただけど?」

訳・私^{わたし}はてつきりマリスは死神ではなくて、殺戮^{ころ}の天使なのかと思つてただけど?

俺は疲労を感じながら、それをマリスに伝えてやる。

おかしい。日本語同士で喋^{しゃべ}ってんのに、どうして通訳^{つうやく}が要る?

「で、どうなの? 殺戮^{ころ}の天使じゃあねえの?」

「……それは本来この現世で肉体を持たない私が、三次元下に存在するためにまとつた概念^{がいねん}」

「スマン、わかりやすく言つてくれないか?」

「だからさ、兄ちゃん。幽霊^{ゆうれい}って体が透^すけてるじゃん? で、きつと死神も一緒なんだよ」

「透^すけてるじゃん?」っておまえ、現物^{げんぶつ}を見たことあのかよ」

「あるよ!」

俺が半眼でツツコむと、楓子は自信満々に答えた。

「触^ふろうと思つてもスカって触れないし、死に別れたら恋人同士でも抱^だき合^あえないんだよ」

マ、マジで!? なにげにスゲー体験してんな、こいつ……。母さんも靈感体質だし、こいつも血を引いてんのか……?

「兄ちゃんだって、一昨日一緒に見たじゃん!」

「日曜洋画劇場じゃねえかこのボケ!」

「……楓子が正しい」

「正しいのかよ、マリス!」

うわ……。現実とフィクションを一緒にすんなってツッコむところなのに、ツッコめなくなっちゃった……。

なんか、振り上げた拳こぶしの下ろしどころがないみたいな感じで、ムズ痒い……。

「……半分正しい。あなたたちからは、肉体を持たない幽霊や死神の姿は見えない。触れることもできない。声も聞こえない。幽霊や死神からは、あなたたちを見ることも、声を聞くこともできる。でもやはり触れることはできない」

ふうむ、そういうもののね。じゃあ、俺がイメージしてる幽霊にかなり近いな。

「で、その体が透けてたマリスさんが、あたしたちと同じような体をゲットしたってこと!」

楓子、おまえはほんとこの手の話の理解力はスゲーな……。

なんだ? 本を読む人は頭いいっていうけど、こういう時は実感できるな。

こいつ、学校の成績はさっぱりだけど。

「……そう。このノートに書かれた設定を借りて、幽霊のような存在だった私があなたたちにも見えるようになった。お互いに触れ合えるようになった」

マリスが座卓の上に置かれていた妹のノートを指す。

「……ゆえに私も逃げた五体も、元々がどんな存在だったとしても、今はこのノートに書いてある通りの力と外見を持って具現化した」

俺は慌あわててノートをめくり……。戦慄する。

改めて読み直すと、どの墮天使や聖天使せいてんしもんでもない化物だ。「聖天使メーブルの【超究霸王滅閃】は天空から一条の光を招来し、対象範囲を消去させる究極絶技で、東京タワーだろうと跡形もなく一瞬で消し飛ばす」とか平気で書いてある。

「マジかよ、とんでもねえ……」

ゴジラとガメラとキングギドラと、あと何かまとめて野に解き放ったようなもんだぞ、こりゃあ。本当に逃がしてよかったんだらうかとうすら寒くなる。

まあ、居座られる方が嫌なわけだが。

「ねえねえ、じゃあ逃げたってメーブルたちも、元は死神なの?」

「……違う。彼女たち五人は本物の幽霊」

「んー、つーことはあいつら元は人間で、死んだあと成仏できなかった連中とか、そんな風に考えてオーケー?」

「……オーケイ」

マリスがコクっと小さく頷いた。無表情なのに小動物みたいで可愛いなあオイ。なんだか胸の中を温かいものが満ちていくぜ。

……って待てやコラ、俺。だまされてんじゃねーぞ、こいつは死神だつての！

「わかってても萌えるよね」

「人の心読むな、楓子」

油断も隙もねえ。

「あと、日本語は正しく使え」

「そのうち広辞苑にも『萌える』が追加されるよ。正しい意味で」

本当にそうなら世も末だな。

「で、これで話がつながったな。おまえら死神から逃げ回っていた幽霊のうち五人が、このノートの設定——概念？——を借りて、これ幸いと生き返ったわけだ？」

まあ、元の人間とは全く別の存在になってしまったわけだから、「生き返った」という表現より、「生まれ変わった」とした方がいいのかもしれないな。

「……あなたたちの単位で七時四十七分十五秒——強い妄執と聖なる炎という、相反する力が混ざり合う気配が感じられた」

うん、父さんがノートを火にくべたのがちょうどそのくらいだね。

「……その気配に引き寄せられた五人の少女の幽霊が、聖邪混沌の力を利用してノートの概念を身にまとった」

なぜ妹のノートに書かれた天使たちが具現化したか？

その疑問に対する答えがそれだった。

「あれ？ 幽霊ってたくさん逃げ回ってるんでしょ？ なんでその五人だけ、生まれ変わることできたの、マリスたん？」

「たまたま近くにいたから、とかじゃねえ？」

「……距離的な近さも関係すると推測。しかし、心理的な近さが最大の要因と分析」

「スマン、もっと簡単に言うത്？」

「……………」

マリスが一瞬言葉を失う。平易な言葉で説明できないらしい。

「……彼女らは漫画とか、アニメとか、そういうものを著しく愛好していた」

「要するに、その五人があたしのノートの素晴らしさを理解できたってことじゃないかな？」
威張りくさって解説する楓子。

「なるほど、そいつらがイタイタしいオタク気質で、おまえの作ったアホ設定と相性よかったってことか」

「なんか言い方にトゲがあるんですけど？」

「トゲがあるように言っただけ」

「兄ちゃんの陰險眼鏡!」

「眼鏡なんかしてねえよ。両眼とも二・〇だよ」

「いやあ、兄ちゃんってラノベだったら絶対眼鏡キャラポジションだしさあ。『エレサー』で言ったら八車智識?」

「ラノベと現実混同してんじゃねえよ」

「あ、舞子ちゃんに伊達眼鏡もらってるから、兄ちゃんから智識コスしよ? 似合うよ?」

「いい加減なこと言っただけじゃねえ!!」

前は俺のこと黒崎水城そっくりって、散々おだてやがった癖に! どあれが、智識なんて陰眼鏡野郎のコスプレやるかよ。冗談じゃない。

激しく鬱陶しくなって、俺は聖書の如きノートの角の固さを確かめると、

「他人が嫌がることはするなっていうのも教えてるだろ!」

楓子の脳天に叩きつけた。

「ぎゃあああああす!」

たまらず、うずくまる楓子。黙らせるのに成功。

「信じられない! なんてそんなひどいことできるの!」

「我が家には、『兄は何をしても許される』というルールがある」

決めたのは俺じゃなくて兄貴だが。

ん? 要するにおまえも散々いじめられた口なんだろうって?

その通りだよ……兄貴に勝てたためしなんかねえよ、畜生……クスン。

「とにかくやめろ。俺には人としての尊厳がある」

「コスプレの遊び心が理解できないなんて、兄ちゃんは人生の八割を損してるなあ」

「今、俺、同情されたの……? ……え? 逆じゃね?」

「でもまだ二割残ってるから。盆栽でも楽しく始めればいいと思っただけよ?」

「おまえにだけは、上から目線で見られたくねえ!」

ぎゃあすきあすき

楓子と醜い兄妹喧嘩をしていると、

「……話を続けたい」

「すみません!」

マリスの髪の毛が首に巻きついて、俺は即悔い改めた。

「というか今の俺のせい? 楓子が脱線させたせいじゃね!?」

「……言い訳は聞きたくない」

「はい、そうですね! 男らしくないですね! さ、静聴いたしますんでお話を続けてください!」

マリスに脅されるまま、ヘコヘコするしかない自分が悲しい。

おかしい、俺は世界一平和な国に住んでいるはずなのに。どうして命の危機にさらされてるんだろう。どこで人生踏み外したんだろう。

ああ、俺の人生設計が……。幸せな家庭が……。八十歳大往生が……。

「……私たちは本来、現世には干渉できない。だから、私もノートの概念を借りた」

「ん。おかげでだいたいわかった。おまえはそいつらを成仏させるため、そんなイタい姿になつてまで追ってきたつてわけだ」

「イタいは余計。可愛いじゃんよ」

楓子に笑顔で太股を掴まれた。座卓の下の見えないところで。

「いや、だってその装飾過多の黒づくめ服とか、オブションの大鎌も堕天使の翼もイタいよ。普通にワンピースとか着てりゃ、俺だって可愛いって同意するよ」

俺は笑顔で妹の太股を振り返した。

マリスが怖いので、これが互いの精一杯の攻撃だ。

「でもさー、せっかくあたしのノート通りなのに、マリスさんはメーブルたんじゃないの?」

「……?」

「つまりこいつが言いたいのはだな、このノートの設定通りに事が運ぶとしたらさ、追手であるおまえこそが女神の聖天使じゃないとおかしくないか? こいつの作ったイタストーリーだ

とそういう設定だろう? なんで殺戮の天使なんだ?」

「別にマリスたんが不満つてわけじゃないだよ? メーブルたんじゃなきゃイヤつてんじゃないんだよ? 純粹な疑問だからね?」

「わーかったから、おまえは黙つてろ。誰もそんなことで責めやしねえよ。な、マリス?」

コクつとマリスが首肯する。

「……話の腰折つたら、また殺されそうになるだろう。

うなずいた後、マリスが疑問に答える。

「……聖天使は設定上最強の概念だったので、幽霊たちに先にとられてしまった」

「あ、そっか。早いもの勝ちで、強い順にとつていったのか」

頭いいな、幽霊たち。

「……だから、私には設定上一番弱い、殺戮の天使しか残つてなかった」

そう言つて、マリスが透明な瞳でじつと俺の方を見つめた。

そう、「透明」と形容するに相応しい、何を考えているか読めない瞳。しかし、不思議と

「虚ろ」とは思わない。

「うん?」急に黙りこくつてどうしたのか?」

俺は訝しんで、楓子とアイコンタクトする。楓子もマリスが何を考えているかわからないように首を振る。

「……これがどういふことか、わからない？」

「ごめん、さっぱり」

「……最弱と決まっている以上は、私一人ではどの墮天使にも勝てない。無論、最強の聖天使にも」

あ、そうか。俺と楓子はそろって手を打つ。

「……だから、私には《婚約者》が必要」

「ばーとなー？」

俺はギリリとして、左手を逆の手で隠した。

左の手の甲には、小さな痣がくつきり残っている。あの不可抗力の乳揉み事件のおり、できたものだ。「仮《婚約》完」の一言とともに。

「……私とともに戦い、力を与えてくれる人」

「戦う!? へ、へえー。でも、別にそいつがいれば他の天使にも勝てるってわけじゃないんだろう？」

「……《婚約者》自身の資質にもよる。が、それでも困難と推測」

「ほら、やっぱり！ じゃあ別にパートナーなんか要らないよな」

「……困難と不可能では天地の差がある。私は藁にもすがりたい」

「で、でも、仮エンゲージってことはまだ本当のエンゲージはすんでないんだろ？ 交代可能

だろ？」

「そうだね、後は兄ちゃんが同意すれば正《婚約》になるよ！ そうなれば交代不可だよ！」
まるで「よかったね」と言わんばかりに教えてくれる楓子。

絶対後でぶん殴る。

「……正《婚約》しよう、英二」

「いやいやマリス早まんなよ！ 他のもつと強そうな奴探せよ」

「……じいー」

「待て待て待て！ 俺を見つめるな！ 困る！」

このノートの設定通りの化物たちと戦うだって!? ザケンナ、命がいくつあっても足りそうにねえよ！ そんなの絶対にごめんだよ！

ええい、何としてでもこいつにはお引き取り願うしかねえな——って思ってたら、

「……協力を断ったら殺す」

マリスの【鋼糸鑿陣】が首に巻きついた……。

「に、逃げたら？」

「……地の果てまで追って殺す」



「て、抵抗したら？」

「……圧倒的な力の差で殺す」

「か、勘弁してくださいって泣いて頼んだら？」

「……聞く耳もたず殺す」

「何でそんな殺したがるんだよ？」

「……殺戮の天使だから」

「誰だよ、こんな設定作った奴!？」

「……楓子」

「デコ助ーーーーー!!」

抗議してももう遅い。

殺戮の天使に殺されるか、それ以外に殺される（可能性がある）か、究極の二択を迫られてしまった。

マリスは一旦髪^{じったん}の毛から解放してくれたが、その気になれば俺くらい秒殺できるに違いない。トホホ……。

「はいはいはい！ 私はマリスさんに全面協力を約束しまーす！」

自分の家族に命知らずの勇者がいるって、生まれて初めて知ったぜ……。

「……ありがとう、楓子」

マリスがベコリと頭を下げる。こういう仕様^{しくさま}だけ見てれば本当に可愛いのによお。

「もう！ マリスさんのお願ひなら、あたし何でも聞いちゃうよ！」

楓子は座卓の上に身を乗り出すと、マリスの首っ玉に飛びつく。

「お礼なんかいいから！ 体で払ってくれりゃあいからグヘグヘ」

そのまま押し倒して、キスの雨を降らしていた。



マリスはいえは、心なしか困惑顔になっているように見えた。けど、それは俺の先入観というもので、無表情のままなのかも知れん。ともあれ抵抗してないので放っておいた。

これがもし妹ならぬ弟の乱行^{らんぎょう}だったら、通報しなければいけないところだったさ。

はあ、身内から犯罪者が出なくてよかった。

女が女を襲うことに関しては、妹が持つ変態嗜好^{へんたいしこう}の中でも毒性値（俺がいかに迷惑をこうむるかの基準単位）が低い方なので、もうツツコまないぜ？

「んじゃまあ、パートナー交代^{かわり}ってことでよかったな。二人とも頑張れ。俺のいないところで」

「ダメだよ！」

俺は当然のことを言っただけなのに、楓子が上半身を跳ね^は起こし、キスを中断してまで全否定される。

「何でダメなんだよ？」



「だって、男じゃないと《婚約》^{エンゲージ}できないんだもん。そういう設定なんだもん」

「それも設定かよこのクソヤロー！」

厄介なノート作りやがって！ 憤懣^{かんぱん}やるかたないとはこのことだよ、まったく！

「第一、なんで俺なんだよ？ 見るからに弱そうだろうが！」

「……武勇が優れるに越したことはない。しかし、《婚約者》^{バイトナ}の資質とは無関係」

「さっきから言ってるその……資質？ 具体的に何なんだよ？」

「……教えたら正《婚約》^{エンゲージ}してくれる？」

「しねえよ！」

こっちゃん何とか回避できねえかって訊いてんだ。その資質とやらが俺より優れてる奴いたら、紹介してやるからよ。

ああでも、聞いたら聞いたでまた敷蛇になりそうで怖いなあ。「背中に三角形のほくろがあるのが資質」なんて言われたら（実は俺にはある）代わりなんか見つかりっこねえしなあ。

俺が弱り切っていると、マリスがまた透明な瞳でこっちを見つめてきた。

「……私には英二を選んだ理由がある。だから仮《婚約》^{エンゲージ}を結んだ」

できれば、そんな理由なかった方がうれしかったぜ。

「……英二は大胆^か且つ勇氣がある」

「あんな会ってすぐで、そこまでわかるもんかよ！」

「……家族を守るためとはいえ、体を張って飛びだす勇気の持ち主はそうはいない」

「む……。ん、そうか? でもよ——」

「……私は感動した」

「や……。まあ、そう言われると照れ臭いけどよ。俺もあんときゃ必死だったってだけで——」

「……英二はチョロい」

「おだててるだけかよ!」

危うくだまされるところだった。ヤバかった。

俺は警戒心を高め、もう一度気を引き締め直す。だというのに、

「なんで渋るかな? 快く協力してあげればいいじゃん?」

このアホ妹は口からアホ言語を垂れ流す。

誰のせいでこんな目にあってると思っとなんじや。

どういう角度でノートを叩きこむと、このアホ妹に己がしでかした罪のかさを教えてやれるんだろうな? 真剣に検討の余地ありだな。

「こんなドラマチックな事件、普通は望んだって起きないんだよ?」

「俺は勉強しなきゃいけないんだよ。クラスの連中は塾だの夏期講習だの通ってんだぞ? だでさえ俺は、父さんたちの反対に遭ってハンデ背負ってるのに……」

父さんは頭古いなあ。勉強は学校だけで事足りるって未だに信じてるからなあ。

母さんに至っては、勉強しないで彼女作って来いとかほざくし。

俺は質の高い授業と厳しい環境を求め、高校はいわゆる進学校を選んだ。だからほんとついていくのに変なんだよ。まだ高一だからって言ってられないんだよ。

「これ以上、後れをとってたまるか。今日だって涼しいうちにやるときたかったのに……」

「兄ちゃん、世の中には勉強より大事なものがいっぱいあるんだよ?」

楓子がしたり顔で説教しやる。

そりゃ俺だってなあ、勉強だけが唯一絶対のもんだって言う気はねえよ。そこまでバカじゃねえ。ダチも作らず机にかじりつくとか、家族が熱出してんのに無視して宿題するとか、恐喝した金で塾に通うとか、そういうことはしねえよ。

「だけど、少なくともマリスと波乱万丈やるのが、勉強より大事だとは思わねえ」

一般市民の感性持てれば、誰だってそう思うさ。

「(。・。・。・)」

とりあえず考える時間をくれ——

俺がそう頼んだら、意外にもマリスはコクッと頷いた。

激しく反対されるかと思っていたから、肩透かしだった。そうしたら理由も教えてくれた。

「……逃げた墮天使たちの捕捉にも時間が必要」

無表情なのに、心なしか無念そうにマリスは言った。

なるほど、まずはあいつらを探しださんことには切った張ったは起きないし、だったらそれまでパートナーの出番もないわけだ。

ちなみに、じゃあどうやって探すの? ——という疑問にも無念そうに答えてくれた。

「……私たちは一定以上の魔力を使用した場合、その波動は現世の隅々まで行き渡る。その魔力を感知できるまで捕捉は不可能」

という設定が楓子のノートに書かれているらしい。つまり、逃げた連中の誰かが暴れだすのを手をこまねいて待つしかないわけだ。こりゃまた厄介な——いや、俺からすれば好都合な設定だな。楓子にしちゃ粹じやないか。褒めてやってもいいね。

「……それまで英二はゆっくりしていい。でも、それまでには決断しておいて欲しい」

マリスは最後にそう付け加えた——という顛末である。

まあ、決断なんてする気はないけど。とまれ時間稼ぎに成功。

どうすべえかと悩んでいると、昼が近づいてきた。

うちは山林の中にあるから割合過ごしやすいんだが、それでも暑くないわけじゃない。

「てか、おまえはそれ、平気なの?」

座卓の向こうに正座したままのマリスに、俺は顎をしゃくって見せる。

黒づくめってだけでも暑苦しいのに、下に着てるシャツも首のところまでビチッとボタンを留め、ネクタイまできっちり締め、見てるこっちの方が汗だくになりそうだぜ。

その上、楓子がウザいくらいじゃれついているので暑さ倍増。もし俺がマリスの立場だったらキレル十五歳と化して、血の海に沈めていたかもしれない。

「……暑い」

やっぱり墮天使でもしんどいらしい。表情が涼しげなのでわかりづらかったが。

「じゃあ、脱いだら?」

「……わかった」

マリスがシュルッとネクタイを外した。次いで、ごそごそと黒い上着を脱ぐ。それからシャツの襟首の第一ボタンに手をかけ、第二ボタンに手をかけ、第三ボタン——

「待てやあああああ」

「……?」

「小首傾げてもダメ! なんてシャツまで脱ごうとするんだよ!」

「……あなたが脱げと言った」

「全部脱げとは言ってねえよ! 察しろよ!」

「……難しい」

どうもマリスは言葉の綾とか読みとるのが苦手な奴らしい。

天使どもは皆そうなのか？ いや、違うか。他の五体は元は人間って言ってたもんな。マリスだけは外側も中身も人外。だからか。しち面倒な奴。

「……脱ぐのはダメ？」

ダメに決まってるんだろが！

「百歩譲って大胆開襟まではいいよ！ はしたないけどな！ 暑いしな！ でもその下まではだけるのはダメ！」

「……わかった」

マリスは第二ボタンまでで許してくれた。ともすればブラチラしちゃうが、そこは俺が努力して目を逸らせばいい。いやー、俺って紳士。日本男児。

「兄ちゃん、兄ちゃん！ マリスさんは下着も黒かなあ？」

「てめえはちったあデリカシー持てや！」

「テヘ」

楓子は自分を軽く小突き、舌を出した。まるで悪びれてない。

「……確かめる？」

「何を仰おしやってるのかわかんないなあハハ」

この殺戮の天使さんは青少年が日ごろどれだけ飢え、且つその渴きを抑えることに苦心しているか知らないことだけはわかった。

なんて心臓に悪い。ドッキンコドッキンコうるさい胸を宥なだめるため、俺は素数を1から数えなければならなかった。

「つかさ、楓子。おまえ、なんなのよ？ 普段はさんざん俺のこと好きとか冗談ばかり言っ

として。マリスにベタ惚ほれじゃんよ」

俺は話題を逸らすために、からかい口調でそんなことを言ってみた。

いやいや決して拗すねてんじゃねえんだ。これはいい傾向なんだよ。楓子がどういう気で俺のこと好き好き言ってるのか窺うかがい知れねえが、実の兄相手に不毛極まることは違う。

これを機会に兄離れして欲しいし、他の奴に目移りするのは決して悪くないことだろう？

ん？ 女同士じゃ結局不毛には違いないだろうって？

いいんだよ。俺が迷惑こうむらなくなるんだから、知ったこっちゃねえよ。

なーんて内心ほくそ笑んでたわけよ。

「あれー？ 兄ちゃん、マリスさんにあたしをとられそうでジェラシー？」

そしたら、楓子がニタァーっと小悪魔みたいな笑みを浮かべた。

「は？」

俺はその顔面目がけて座布団をぶん投げた。ち、かわされたか。

ムカつくんだよ、その「してやったり」って顔。

しかもマリスの野郎がよ。俺たちの顔を交互に観察した後、ボソッと言いやがったのよ。

「……近親相姦？」

「なんでそんな言葉知ってんだよ!？」

ああもう、今日は朝から大声出しまくって喉が痛いぜ。
ただでさえツツコミどころの多い奴がいるのに、それが二人に増えちゃった。

「ん？ 待てよ……」

ツツコミどころといえば俺はさっきからずっと、かなりきつい語調でマリスにツツコミまくってしまった。正論を唱え続けたのだから俺は何も悪くないが、今までのパターンだとマリスが「……私に説教したら殺す」とか言っつきそうなものだ。

だが、それがない。

不合理な理由で殺しはしないとマリスは言った。きつとその通りなんだろうな。腫れものに触るようにビクビク怯える必要はないのかもしれない。

うむ。だんだんマリスとの接し方がわかってきたような気がする。

「楓子、おまえの服貸してやれよ。涼しい奴」

だから、そんな言葉も気軽に出てくるってもんよ。

「無理無理。頭半分違うもん」

「む、そりやそうか」

それだけ身長差があると、服のサイズも合わないわな。

「でもまあ、下着はあたしのでいいかなー」

楓子が好色な視線で、マリスの体のラインを上から下まで舐め回すように見る。

起伏の乏しいラインを眺めて何が嬉しいんだか、こいつは。

「理子さんなら、マリスさんと同じくらいだったのにねー」

「む……理子か……」

ちなみに理子ってのは俺の幼馴染ね。よろしく。

山本家は吉岡家のご近所さんで、その理子、舞子姉妹はそれぞれ俺、楓子と同年。昔っから家族ぐるみでつき合いがあった。

「あいつらが東京に行っってたきやなあ……」

理子のご両親はファッション関係の仕事をして、エライさんになっちまって去年から東京の本社勤務をしている。うん、理子は妹とお手伝いさんと三人で暮らしているんだ。で、この夏休みを利用して、姉妹で東京観光がてらご両親のところへ行っただよな。

「間が悪いな」

いたら、服くらい喜んで貸してくれただろうにさ。

「どうすっかなあ……」

「服ならワシが買ってやろう」

いきなり襦が開いて、父さんと母さんが姿を見せた。

び、びつくりさせんなよ、ひぐまおやじ 罷親父。死んだふりしようかと思っただじやねえか。

「と、父さん、もういいの!」

「うむ、優子さんの看病のおかげでな」

俺は絶句するしかなかったね。

白目を剥くほどの重いギックリ腰からもう立ち直ったらしい。この父こそ真に化物じみていてるって奴よ。そう思うだろ? いやあ、一連の異常事態やマリスともそれなりにつき合えてるのは、常日頃つねひごろからこの妖怪まがひのおかげで慣らされてるからかもな。俺はそう確信したぞ。

「パパ! あたしには? あたしには?」

「何だ、楓子? 小遣いの前借りがしたいのか?」

「ぶーけち」

そんな甘い親父じゃねえっていい加減さと悟れよ。

「だが、その前に話がある。いいかな?」

父さんが訊くと、マリスがコクつとうなずく。

「ちようどお昼だし、ご飯を食べながらにしましょ」

母さんが手を打ち、俺はマリスを台所へ案内した。

「——というわけで、私は逃げた五体を追わなくてはならない」

台所でマリスが、さつき俺が聞かされたのとはほぼ同じ話をし終えた。

二度手間を面倒くさがることはなかったし、無表情で淡々と語る姿はけっこう真摯しんしに映るもんだ。父さんは真剣に耳を傾け、母さんは料理をしながら何度あいつろも相槌を打っていた。

「そうか……あの怪異はそういう事情だったか」

深く得心がいったのだろう、父さんが腕組みしたまま一度、大きく頷いた。

「マリスちゃんと言ったか……君の小さな双肩にはそれほどの重圧がのっているのだな」

「……彼女ら五体は強敵」

父さんが目頭めがしらを押さえる。感極まったらしい。

マリスが少女の姿をしているのは、あくまでそういうノート上の設定だからじゃねえの? 本質的には父さんが思ってるような、か弱い存在じゃねえだろ? と俺は思うわけだが、言わずもがななので黙だまっておいた。

「いいだろう、好きなだけうちになさい。ワシも協力は惜しまない。楓子、後で空あいている部屋をマリスちゃんが使えよう、片づけてやりなさい」

「やった! パパ話せる!」

楓子がマリスと手を取り合って喜ぶ。もつともマリスはされるがままに、腕を振り回されているだけだったか。

「駆け込み寺って言葉があるじゃない? でも、うちの神社だって昔はよく家出少年を保護し

たものよ」

「最近はめつきりなくなったがな」

母さんがカツオ出汁^{だし}の味見をしながら懐かしそうにし、父さんがうなずく。ともかく余所様^{よそさま}の子（子か？）を受け容れる体制はできてるってこと。

「……ありがとう。こんなによくしてもらえて、私は運がいい」

マリスがぺこりと頭を下げる。

こいつ得だよなあ。感情を抑えた喋り方をするので、かえって全く社交辞令に聞こえないんだよ不思議。これには父さんも母さんも気を良くしたようだった。

「うちの子になったと思って、何も遠慮要らないからね、マリスちゃん」

母さんが料理の手を止めてウインクし、父さんがウムと同意する。

「こんな可愛い娘が増えたら、私たちも嬉しいわよね、あなた」

「ああ、悪くないな」

「子どもは多い方がにぎやかだものね、あなた」

「うむ、その通りだ」

「じゃあ、今夜もう一人作る？」

「ゲホゲホゲホゲホ、ゲホン！ ウオッホン！」

父さんがいかつい顔を耳まで真っ赤にして、咳払いで誤魔化^{ごまか}した。

俺は聞かなかったことにしてやった。武士の情けって奴よ。でも楓子は「ヒューヒューらぶーい」と冷やかした。あ、バカめ……。

「親をからかうとはいいい度胸だ、楓子」

「ひいひいDV反対！」

楓子が父さんの拳骨^{けんこつ}をもらって泣く。おまえはほんと懲りんな……。

今、母さんは料理中だし、咄嗟^{とっさ}には動けないし、さりげなく助けるなんて無理だぞ？

そして、そんな吉岡家一同を見回しながら――

「……やはり私は運がいい」

マリスがそう小声で呟^{つぶや}いたのを、俺は聞き逃さなかった。

無表情のマリスの透明な瞳に、なんだか温かい光が宿ったように見えたのは、俺の錯覚^{さくさく}だろうか？ マリスが一瞬まとった印象的な空気だった。

思わず、見惚れてしまうほどに。

「うふふ」

母さんの笑い声で、俺は我を取り戻した。いつの間にか料理の手を止めて俺の傍^{そば}に来ていて、耳打ちしてくる。なにかもわかつてます、みたいな嫌らしい顔で。

「あなたには冷や冷やさせられたけどさ――」

「何がだよ？」

「いつまで経っても妹離れできないし——」

「ふざけんな。あいつが兄貴離れできないんだよ」

「理子ちゃんとは全然脈なしだし——」

「俺たちは厚い友情で結ばれてるの。下衆な考え方はやめてくれ」

「ほら、お母さん正統派ラブコメ好きでしょ？ 禁断の愛とか胸が痛んでダメなの。だから、この子は本気で妹に恋してるんじゃないかとお母さん心配で心配で——」

「ついでに明日空が降ってくるんじゃないかと心配してたら？」

「とにかく、いい子が来てくれたわねって話よ。頑張んなさいよ？ 正統派ラブコメ」

「頑張らねえよ！ 何も！」

「あんたがお嫁さんにもらったら、戸籍上も娘になるじゃない」

「そもそもマリスに戸籍なんてものではない！」

この母はちゃんとマリスの事情を理解できているのかと、不安になった。

俺は妹及びマリスのせいでワケノワカン事態に巻き込まただけで、母さんが思うようなラブコメ的シチュエーションが発生しているわけではない。

そもそもマリスは人じゃない。

可愛いと思うが、そこは線引きして考えるべきだが。なあ俺、間違ってるか？ マリスにしたって恋愛感情なんて情動を持っているのかどうかも怪しい。

でも、言いたいだけ言って母さんは満足したのか、料理に戻った。

父さんの看病で飯を炊く時間がなかったので、お昼はうどんだ。それに野菜と小エビの掻揚げをたくさん添える。

「ところで話は戻るが——」

天ぶらが揚がるのを待つ間、父さんがマリスに問う。

「その堕天使と聖天使は実際問題どうなのかね？」

「……どうとは？」

「危険なのかね？」

マリスはコクつと頷いた。それで父さんは「むう」と深刻な顔で唸る。

「……これは私たちにとっても前代未聞の事件」

まあ、そうだろうな。幽霊が生き返るとかありえねえよ。

「……本来成仏する運命にあった彼女らが、全く別の存在に生まれ変わり、しかも超常の力を手に入れたとなると、いったい何をしでかすかわかったものではない」

「脅すなよ」

「……脅すなどと無意味なことほしない。私も私の推測が外れることを願っている」

そ、そういう言い方されると本気で怖いじゃねえか……。

「で、その堕天使と聖天使を——」

「いちいち分けて呼ぶの面倒じゃない、父さん？」
 一体だけ墮天使じゃないのが混じっているから、ややこしいんだけどな。
 「では何と呼ぶ？」
 「はいはい！」

楓子がシユタつと挙手した。

「『A.N.G.』と書いて『アンジェ』と呼称統一するのがいいと思います！」
 「何でA.N.G.？ 天使が英語でAngelだから？」

「『Avatar of NoIie Girls』の頭文字をとって『A.N.G.』だよ、兄ちゃん！」

「あ、あづ……。」

「『Avatar of NoIie Girls』。意識すると『死せる乙女たちの外装』かな？」

なんでそんな英語がスラスラ出るのよ……。中二病患者ってすごい。

それを英語の成績に活かせないの？

「ま、まあ、それでいいんじゃないの？」

何かイタイタしい名前をつけられるよりは、楓子の提案にしては毒性値低いな。

アンジェなら人の名前だし、どっかのバンドでいそう。呼ぶのに抵抗はない。

「そのA.N.G.を生みだしてしまったのには、ワシも責任がある」

「……京平には霊的な力を全く感じない。いわば霊的純潔ともいうべき存在の手により聖邪



混合の儀式が行われたことで、A.N.G.たちが生まれる可能性が高まったのかもしれない」

やっぱ呼びやすいのか、すぐに定着した。

「わかった。ならば、ワシがそのパートナーになろう」

「さすがパパ、かっこいい！」

「おお……」

俺も心底感嘆した。この父ならば戦闘力でも申し分はない。確か、強いに越したことはないんだろ？

その上、俺は助かる（ここの一番重要）。

「ダメーーーーー！」

せっかく喜んでたのに、母さんが力いっぱいダメ出しした。

「な、なんでだよ、母さん？」

「ダメ！ 浮気なんかダメ！」

「ま、待て、優子さん！ ワシは浮気など——」

「しかも、ついさっき娘みたいなのって決めた子相手に不潔だわ！」

「母さん、冷静になれよ！ これは浮気なんかじゃないって……」

「いやーなーのー。京平さんはあたしものじゃないといーやーなーのー」

「どういう理屈だよ……」

「とにかく、いーやーなーのー。誰にも渡さないのー」

拗ねて唇を突きだし、駄々をこねる。ほとんど幼児だ。普段の母親然とした雰囲気が消し飛び、ある意味一人の女になっている。

「あたしはママの気持ち、わかるなあ」

「さつき父さんの決断褒めてたじゃねえか、コウモリ野郎」

「あたしは刹那の自分に正直だからいいの！」

「お母さんだってそうよ！ だから、いーやーなーのー」

そうだこの人楓子の母だった。俺は頭を抱えた。

「どうしてもというなら、このあたしを倒してからにしろさい！」

「……いいけど」

俺は椅子に座ったまま、試しに爪先でチョコンと母さんの脛を蹴ってみる。

「ひぎいいいいいい」

ひっくり返った。母さん超打たれ弱い。

「家庭内暴力とはいいい度胸だ、英二！」

「げごおおおおおおおおおおおお」

すかさず父さんの鉄拳——億倍の家庭内暴力が飛んできた。

うあ……出てる出てる……目から星出てる……アハハハ。

ぐっふう、軽率なことしちゃったぜ。猛省しよう。

「やだーやだーやだーやだー」

その間にも母さんは駄々をこね続ける。ひっくり返ったまま両手両足をバタバタさせる。もうこうなったら楓子と一緒に手がつけられない。やはり血か。

「わ、わかった、優子さん。撤回する。撤回するから、許せ」

父さんの謝罪を聞き、母さんはムクリと立ちあがると、父さんにびったり寄り添う。

「……キスしてくれたら許す」

「キッ!? いやあのしかし、子どもたちの手前だな……ゴホンゴホン」

「冷めたんだ……マリスちゃんを見た途端、私への愛が冷めたんだ……」

「ち、違うぞ！ 断じて否！ ワシは世界一優子さんを愛している！」

「じゃあ、証拠……」

「わ、わかった」

黒みtainなオッサンがもじもじしながら、拗ねた母さんの唇にチュッとキスする。キモい。

「というわけ。ごめんね、マリスちゃん」

母さんが母親の顔に戻ってマリスにウインクする。マリスもコクつと了承する。

「というわけだ。すまん、英二」

「何が『すまん』だよ、父さん!?」

「う、うるさい。おまえだつてワシの血が流れているんだ。そのうちわかる。女に逆らつても仕方ないんだと、そのうち諦観^{ていかん}ができる」

「わかんねえよ。できねえよ」

「いいや、おまえもワシの子なら女に弱いはずだ」

「情けねえこと断言しないでくれよ」

「『やれやれだぜ』とか言いながら、結局女のワガママを聞いてしまうような男になる」

「絶対にならねえよ」

「クスクス」

「なに意味深に笑つてんだよ、楓子!？」

父さん（＋飛び入り参加の楓子） 相手に俺がケンカをしていると、ふとマリスと目が合った。

「……やはり私は運がよかった」

「うわあすげえ舐められた気がする！」

「……ありがとう」

マリスがぺこりと頭を下げる。父さんに。そこは俺にはないのかとかなり不満だぞ。

しかし、まさかこんな形でパートナーになれと強要されるとは思いもしなかった。

「何とかならないのか、楓子? 後生だ」

「んー。よく考えたら、ならない」

「何ですよ?」

「忘れてたけど、『婚約者^{パートナ}』は十代男子に限るつてノートに書いてた。テヘ」

楓子は自分の頭を小突きながら、舌を出す。悪びれてない。

「それを早く言え!」

その脳天に、俺と父さんは拳骨を振り下ろした。

おお、さすが俺たち親子。ナイスツーブラトン。楓子なんか一撃（二撃?）で撃沈だぜ。

けど、八つ当たりにはかならんよな、これ。結局は俺にしか白羽の矢は立たないのか?

泣きたいのはこっちだぜ……ぐす。あ、ほんとに泣けてきた。

俺はやるせなさで、楓子が痛みでメソメソしていると、

「そうと決まれば、英気を養わなきゃ。いっぱい食べてね」

母さんがうどんと大皿に盛られた揚げ物をテーブルに運んできた。

「まだ決まってねえよ!」

なんで誰も彼も既定事実にしちゃうわけ? もう自棄食^{やけぐ}いするしかねえよ。

出汁も効いてるし、天ぶらもサクサクで美味しいなあ!

もしパートナーを引き受けたら、これが最後の母さんの手料理になるかもしれないな。そう思うと美味^{うまい}さがひとしおだよ!

——なんて、俺がヤサグレながら貪^{むさぼ}つてると、

「……おいしい」

マリスも同じくらいハイペースでついてきていた。

「遠慮ってものを知らないのか？」

散々振り回されていることもあり、つい俺は当てつけがましいことを言ってしまう。

「……………」

母さんに差しだそうとしていた空っぽの井を、マリスは無言で引つ込めた。

無表情のままなのに、心なしかしゃべっているように見える。

う、嫌みがすぎたな……。すまん、後悔。

「もうちの子なんだから遠慮なんかしないでいいんだよ、マリスたん！ どんどん茹でるし、どんどん揚げるから好きにだけ食べてね」

「楓子ったら。作るのはお母さんなのに調子いいんだから」

楓子はもう一度「テヘ」っと自分を軽く小突き、舌を出す。

「でも、楓子の言う通りだからね、マリスちゃん」

「……ありがとう、楓子。優子」

母さんがうんのお代わりを注ぎ、マリスが無表情のままじゅると音を立ててすする。

楓子はその食いつぶりをキラキラした目で眺めている。

まさに団欒というべき光景に、俺は一人ばつが悪くなってそっぽを向く。

「マリスちゃんを歓迎するという、ワシの決定が気に食わんとはいい度胸だ」

反抗期真っ最中の少年のように、親父の拳骨を食わされた。

「ちくしょううううううううううう」

よくわかったよ。この家には俺の味方はいないんだな！

昼食後、俺は楓子とマリスと一緒に居間へ戻った。

ちなみに父さんは神主の、母さんは巫女服に着替えて参拝客の対応をしている。

俺が自室に戻らなかったのは、

「……お願い。傍にいて」

と、マリスに袖をつかまれたからだ。

「え!？」

「……胸が苦しい」

マリスはそう言って、自分の胸に手を当てた。

相愛わらずの無表情だったが瞳が心なしか潤んでいて、妙に色っぽくて俺はドキマギした。

「な、な、なんだよ、急に?」

どうしてこんな告白三秒前のカップルみたいなことになってんだ? いつからマリスは俺のことを? —— つてさ。原因に心当たりがなくて、当惑したんだよ。普通するよな? な?

「……お腹いっぱいで苦しい。吐きそう」

「ただの食いすぎかよ!」

俺のこのトキメキを返せ! ——つて後で叫んだけどさ……。心の中で。

「……うう」

小声ではそばそうめきながら、マリスは畳の上にグロンと横たわった。

そんなに無理に胃に詰め込まなくてもよかったのによ。俺はこの殺戮の天使の考えていることがよくわからない。

「……胸さすって」

「女相手にできるかよ!」

ほんとわからない。

「……じゃあお腹でもいい」

「むう」

結婚前の女の胸をまさぐるなど言語道断だが、お腹くらいはアリか? 悩むぜ……。

すっげえ苦しそうだし、それで楽になるならしてやるべきか? 陣痛に苛まれる妊婦さんのお腹をさすってあげるなんてのはよく聞く話だし、看病する側に疚しい気持ちなどないはずだ。

……いや、待て。それだよ。看病する側の気持ちが問題だな。こんな可愛い子(見た目は)

のお腹をナデナデして、妙な気持ちをもよおさない自信はあるか? 正直ない。参ったな……。

「……ダメ?」

「むう」

俺が悩んでる間にも、マリスが急かす。

「やれやれだぜ。仕方ね——」

俺はマリスの傍らにしがみ——

「ダメ——!」

楓子の容赦ないラリアットを食らった。

「痛ってええええええええ」

いきなり何しやがんだデメエ!?

「兄ちゃん、そんなのずるい! ヒイキ! ヒイキ!」

「何がヒイキだ!」

「マリスたんのお腹さするなら、あたしのおっぱいも揉んでくれなきゃ公平じゃない!」

それはどこの国なら通じる理屈だ……?

「もういい……怒るのも疲れた。おまえが代わりにマリスをさすってやれ」

「兄ちゃんの頼みなら仕方ないなあ」

楓子が手をワキワキさせながらマリスに迫る。

「……楓子の意地悪」

マリスが心なしに恨めしげに言った。しかも口とは裏腹に、俺の方見て。何だよ？

「クク、こっちゃん生まれた時から唾つけてんのよ。マリスさんでもそう簡単には渡せんなあ」
楓子が不敵に笑った。何言ってるの、こいつ？

しかも、気のせいかな二人の間で火花散ってる。

「……？」 こいつらさっきまで仲良かったんじゃないの？

「まあでもそれはそれとして、さすって欲しいよね、マリスたん？」

「……お願い」

楓子がマリスの懇願を聞いてやってた。

「ウへへ、ねーちゃんエエ腹しとるやんけー」

「……楓子。もっと優しくして」

「ワシヤ激しいのが好きじゃけんのー！」

なんだ、やっぱりこいつら仲良いんじゃない。百合百合じゃん。

ちよつともったいなかった気もするけど、ちゃんとさすってやれよな、楓子。

「マリスもさ、マジで吐きそうになったら言えよな。洗面器持ってきてやるから。おまえ、無表情だから自己申告してくれねえと全然わかんねえぞ？」

「……わかった、英二」



「そもそもその無表情をもちっと何とかできんのか？ 愛想ふりまけとまでは言わんけど」

「しょうがないよ、兄ちゃん。マリスたんはクーデレだもん」

「はあ？……クーでレだあ？」

俺は胡散臭いものを見る目つきで楓子を見た。

「知らないの？ 普段は無表情無愛想のクールビューティーなんだけど、フラグたつてデレたら笑顔を見せてくれる女の子のことだよ」

「知らんし、言ってる意味がさっぱりわからん」

「一般常識だよ？」

「それだけは嘘だと断言できる！」

「普段は冬の女王のような彼女が見せてくれる、小春日和のような笑顔！ その温かさ！ このワビサビがわからないなんて、兄ちゃん日本人じゃないと思う」

「はん、アホくさ。そんなメンドクセえ女、現実に行ったらこっちから願い下げだね。疲れるだけだ。いつでも笑顔でいてくれる子の方が絶対可愛いに決まってる」

この意見にはぶっちゃけ自信がある。きっと十人いたら十人賛同してくれるはずだ。

そうだろう？

「なあ、マリス。試しにちよつとでいいから、笑顔作ってみてくれないか？」

「……わかった」

寝転がったまま、マリスが無理矢理笑顔を作ってくれる。

「……これでいい？」

顔面の筋肉を使って強引に口の両端を吊りあげた、鬼瓦みたいな笑顔だった。コワイ。

「ぶふっ。ごめん、むしろ俺の方が笑え——」

「……それ以上笑ったら殺す」

「——たりはしませんよ、うん」

動けないマリスとは別の生き物のように【鋼糸鑿陣】が首に巻きついて、俺は口を閉ざした。

「……疲れた」

マリスが無表情に戻る。ありがと、もう充分。こいつの笑顔は全く期待できないな。

しかし、よ——

クーデレうんぬんはともかく、こうしてマリスとダべるのは悪くなかった。殺戮の天使と一緒にいるつつうトンデモな状況に慣れつつある。

パートナーになれとか戦いだとか、殺伐とした話は今でもごめんだ。けどよ、こうして普通にマツタリすごす分には、別にいてくれていいんじゃないか？ ああ、そうさ。歓迎してもいいって気分になっていたわけさ。俺は。

「ねえ、マリスたん。服の前、完全にはだけた方が楽になるんじゃないかな？ あとスカート

もベルト抜いて、少しはだけたら？ グヘグヘ」

マリスを看病する楓子がドサクサに紛れて、ただれた欲望を剥き出しにさせる。困った奴だがこの妹もマリスが来て、浮かれてはしゃいでいるのだとよくわかる。

「……わかった、楓子」

「ダメだっつの。おまえら、ここに男がいるってこと考えろよな——」

二人にツッコむ声も、自分でびっくりするほど柔らかい。

こういう和やかなムードは、うん、いいな。

「ちよっと参考書とってくるわ」

俺は自室から勉強道具一式をとってきて、座卓の上に広げる。

「ウへ。兄ちゃん、こんな時まで勉強すんの？」

「こんな時もそんな時も、いつだって勉強に励むのが学生の本分。朝の遅れを取り戻さんと」

「兄ちゃんのガリ勉強鏡」

「誰が眼鏡だ、誰が」

裸眼二・〇だっって言ってるんだろ？

「でも、そんなこともステキ」

右手でマリスをさすりながら、左手で投げキッスしてくる楓子。

俺は真摯な気持ち込めて、蠅でも追っ払うジェスチャーで応える。

「おまえ、わかってんのか？ 兄貴は神社継げるからいいけどよ。俺たちは——いや、待てよ。」

この言い方は卑怯^{ひきょう}だな。兄貴はちゃんと勉強して、いい大学行ったもんな」

ことあることにいじめられたクソヤローだが、見習うべきところには敬意を払わないとな。じゃないと俺、いつまで経っても兄貴に追いつけねえよ……。

「とにかく、俺たちには何も残らないんだぞ? 勉強して、いい学校行って、社会に出て、自立した大人にならなきゃいけない。その自覚持つてんのか?」

中学生相手に何言つてんだと思うだろ? その意見もわかる。だが、俺だつてこのちゃらんぽらんすぎる妹の将来が不安なのよ。だから、これは愛の鞭^{むち}つてもんさ。

別に俺みたいにガリ勉しろとは言わんよ。遊ぶ時は遊ぶべき。ただ、こいつは一学期に赤字とりまくりだから、夏に挽回^{ばんかい}しとかなないと二学期もヤべーんじゃねえのつて話。

「ちゃんとわかつてますー」

「ならいいけどな」

「あたしは兄ちゃんに養ってもらうからいいんですー」

「オイ、待てや」

おまえは何か? 親だけじゃなくて兄の脛^{おれ}もしゃぶり尽くす気か?

「そうじゃなくてえ。ま、法律上は結婚できないけどお? 事実上ならグフフだし? 要するにあたしのために頑張つてね、ダーリンつて話♥」

「おまえが何を言っているのか、さっぱり理解できん」

おかしいな。俺、国語もそんなに苦手じゃないんだが。

「……英二は勉強好き?」

楓子が頑張つてる甲斐^{かい}あつてか、幾分顔色のよくなったマリスが訊いてくる。

「正直、好き……ではない」

クラスじゃ何人が好きって奴いるけどな。しかもポーズとかじゃなく、本気で。

「でも、やらなきゃいけないからやる。明日のためなら今は堪え^{こら}なきゃ」

明るい未来と笑顔の奥さんと幸せな家庭のためにな。

「……その考え方はとても合理的」

だろう? マリスならわかつてくれると思った。

「……頼もしい」

なんか、褒められた。無表情だから、全然そう思えないけど。

「何が?」

「……本来の資質とは関係ない。しかし、《婚約者^{ぐんやくしや}》はより賢明な方が理想的。その上、現状を見据^{みす}えて試験をよしとする精神を持つている。英二、やはりあなたと《婚約^{エンゲージ}》したい」

「おまえ、何でもいから俺を持ち上げて、その結論に持っていきたいだけだろ?」

「……バレた」

このクソヤロウ。淡々と言いやがって。全然悪びれてねえ。

楓子みたいにチロつと舌でも出してみろよ。おまえがやったらさぞ可愛いだろうぜ？　しやあねえなあ許すかってなと思うぜ？

そっだよ――

マリスが普通の女の子でさ。別の出会い方してさ。クラスとか一緒になつてさ。もうちょつと普通に笑顔を見せてくれたりしたらよ。

俺なんか、きつと一発で惚れたに違いねえぜ？　恋愛より勉強つてポリシーも返上してたかもしれないさ。

もったいねえ。ああ、もったいねえ。でも、世の中そんな甘くねえ、ままだらねえつてのが現実つてもんだよな。俺らは地につけて生きなきゃいかんわけだよ。さ、次の問題解くか……。

この続きは1巻を買って読んでね！
マリスさんは超かわいいし、ロザリンド様は超かっこいいんだぜえー！



あるいは現在進行形の黒歴史

―― 殺戮天使が俺の嫁？ ――

試し読み体験版

発行 2010年8月31日 初版第一刷発行
著者 あわむら赤光
発行人 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木2-4-5
電話 03-5549-1201
03-5549-1167(編集)

装丁 株式会社ケイズ(大橋 勉/彦坂 暢章)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示しております。
©Akamitsu Awamura

Printed in Japan

GA 文庫